

第8章 女子補導団活動の実際－地方における展開

本章では東京の活動について検討したが、本章では地方の活動について概観を試みたい。以下、組の発足年代順に、神戸、大連、大阪、盛岡、大宮、福島、長春、日光、沼津、長野、茂原、草津、久喜の順で概要を確認していきたい。発足時期、地域と団体名、指導者、さらに活動の背景を確認しながら内容を概観していきたい。東京で結成された組から関西の神戸、大阪での結成と内容、さらに地方都市や大連、長春という海外での活動の特色について個別に検討を行っていきたい。キリスト教主義にもとづく運動を変化させて、補導団に改組しさらに地方での普及はどのように進められていったのか、その際、その活動は地域や教育関係者、さらに当時の少女たちにどのように受容されたのか考察を行いたい。

以下、結成年代順に組の結成状況を確認すると次の通りである。

第1節 神戸第1組、神戸国際組－松蔭女子学院（1923－1929）

神戸においては、松蔭高等女学校の教職員と生徒が活動していた記録が残されている。聖公会系の松蔭高等女学校および近接したミカエル教会での活動である。すでに、在日イギリス人によるボーイスカウトがフレデリック・ウォーカーによって、また、古田誠一郎による神戸ボーイスカウトが結成されていたが、1924（大正13）年1月の『神戸ボーイスカウト会報』創刊号には、次の記事がある¹。

「ガールガイド（小女補導会・ママ） ガールスカウトの兄妹である同会は目下四十余名あり、小女の社会奉仕として、浅野ソワ子、上西八枝子が藤喜代子氏等幹部役員として尽力されているとのこと。切に其発展を祈ります。」

上西ヤエ（八重子の記述もあり）は淡路島出身で後にミカエル教会の婦人伝道師となるが、当時、松蔭高等女学校の教員で寮監をつとめており英語も堪能であった。浅野ソワ子は松蔭の日本人初代校長、浅野勇の妻である。上記の記述からして、1923年度には神戸における40名ほどのガールガイドの発足が確認される。なお、神戸でガールガイドが発足したこの年は、関東大震災があった年であり、イギリスに休暇で帰国していた東京女学館勤務のD.E.トロット（Miss. Trott Dorothea Elizabeth）が9月はじめに再来日して横浜から上陸を試みたが不可能のため、9月から神戸で約一年を過し、翌年7月まで松蔭高等女学校の教員をつとめていた事実がある。トロットが松蔭と東京女学館両校の制服洋装化に大きな影響を与えたことは先述したが、学校文化そのものに一定の影響を与えた人物である。また、トロットが後に東京女学館で女子補導団の運営にも協力したことから、何らかの松蔭の補導団活動とも何らかの接点が考えられるが、明確な資料は残されていない。

同1924年11月3日には「全国体育デー、ミセスマシューのガールガイドに関する講話」が松蔭女学校で行われている²。1925年の『少年団研究』誌上の女子補導団発足に関する記事でも、在東京のミセス、バンカムと並んで在神戸の団長はミセス、マシューズ（Mrs. Vera Laughton Mathews）と記され、神戸第一の代表者は「神戸市中山手松蔭女

学校内「新井女史」とある³。新井とは体育科教員の新井（兼松）外子のことで、昭和初期まで上西ヤエとともに補導団の担当となっている。

松蔭の補導団については詳細な資料がほとんど存在しないが、機関紙『女子補導団』1928年度に「神戸では団員の時間其の他の都合で普通団員の集会を中止され少女部団員の組を初められました」⁴とあること、翌1929年度には「神戸第一組は集会困難の為残念ながら止むを得ず一時解散されました。又新たに初められる時の来るのを希望致します」⁵、との報告が東京の本部役員からあり、1928年頃からブラウニのみの活動となり、1929年には活動を停止したことがわかる。

松蔭について、付言しておきたいのはイギリスにおいてガールガイド以前にはじめられたGFS（少女友愛協会・Girls Friendly Society）が導入されており、京都の平安女学院高校とともに今日まで継続していることである。イギリスでも国教会を中心に、礼拝、研究、奉仕、親睦を通してキリスト者としての交流を深め、教会、社会、世界への貢献を目的とした同活動については、ガールガイドと比較して伝統的であり、それゆえ保守的側面も併せ持つものであるが、松蔭においてガールガイドとしての補導団が早期に停止した一方で、GFSの継続の事実について検討する必要があることを確認しておきたい。

補注

神戸のガールガイドを考える際に兵庫県ボーイスカウトとの関係を考慮しておく必要がある⁶。

神戸市ではじめてボーイスカウト活動をはじめた人物は、フレデリック・ウォーカーである。ウォーカーは明治期に英国聖公会の宣教師として来日し、神戸聖ミカエル教会に所属し、一方で、日本の青少年に英語を教えていた。彼はイギリス時代にボーイスカウト活動に参加した経験があり、1912（明治45）年、神戸において神戸在留の英国人や米国人の子弟27人を集め、ボーイスカウト神戸第1隊が発足した。大正時代には、聖ミカエル教会の日本人子弟も受け入れることになった。その中には、教会に通い、ウォーカーから英語を学んでいた古田誠一郎、平井哲夫たちがいた。彼らは、ミカエル教会の神父である竹内宗六の協力を得て、1921（大正10）年12月に神戸ボーイスカウト山手隊を発足させた。この動向は、兵庫県のボーイスカウト運動の出発ともなった。ボーイスカウト山手隊には、兵庫連盟第3代連盟長の檜崎四郎が入隊した。

なお、ウォーカーに英語を学んだ鈴木謙三は大日本神戸海洋少年団、増田熊太郎は湊川少年健児団、杉村伸は和田岬少年団、中島政雄は神戸ボーイスカウト荒田隊のリーダーとして活躍した。戦後はボーイスカウト日本連盟の事務局で活躍する古田誠一郎は、1923（大正12）年、神戸市長石橋為之助の要請を受けて、日本最初のカブスカウト、須磨向上会ウルフ・カブを12月に結成した。戦前の兵庫県では、ウォーカー、神戸山手隊発足を契機として神戸、尼崎、西宮、宝塚、芦屋、加古川、姫路

の各地区において100近い隊が発足し、1926（大正15）年秋には神戸地方連盟を結成している。このボーイスカウト運動の展開の出発点には神戸ミカエル教会があり、その意味からも松蔭の補導団は神戸地区での青少年教育運動の中に位置づけることが出来よう。

第2節 大連第1組—大連高等女学校（1924—1931）

大連の補導団は、1924（大正13）年、大連市高等女学校の生徒を中心に、イギリス人宣教師でガールガイド中国支部長・カートリッジ(Cartridge)を指導者として発足した。1928（昭和3）年のカートリッジの帰国後は田村幸子が幹事となり、1931年に活動を停止した。

大連第1組については、1925年度の『女子補導団』創刊号に設立経緯に関する報告があり、以下にその要約を行いながら概要を確認したい⁷。

①大連の補導団は、1924年2月にガールガイド、イギリス連盟本部の中国委員長、ミセス・カートリッジによって組織された。本部に「田中夫人 呉夫人会計 三吉夫人 書記 石田夫人 通訳 守瀬夫人」の役員をおき、各種の事業、集会所の準備、制服の用意等は英語を理解できる「千葉夫人 田村夫人」の協力を得た。5月には、45人の団員を有する第1組が結成され、15人の幼女隊も組織された。指導者訓練所が設定されたが、各種の事情で自然消滅の形となり、言語の違いから通訳に時間を費やす事が多く、その点では多くの成績をあげる事が出来なかった。

②同年、5月には基本金募集のためのコンサートが開かれて団員もそれに出演して、キャンプの実況を演じた。8月にキャンプ生活の第1回を行い12人が参加して、水泳、探索、信号、応急手当、料理等の実習、夜はキャンプファイヤ等を無事行った。9月から翌年5月までカートリッジ夫人が総ての集会に出席出来ない事情があったが、団員は団の維持と幼女隊を補助し、少年団日本連盟、南満州鉄道の総裁をつとめた後藤新平、三島通陽の視察、訪問にも対応し、両者に賞讃された。花園造り、集会所のカーペットその他の調度品もつくっている。

③1925年6月には、団員全員が2級テストを受ける準備をすすめ、幼年隊の中の熱心なメンバー16人もブラウニの2級バッジ取得を目指している。7月にはこの団を離れて東京の大学（高等教育機関）に進学した4名が夏休みに大連に戻り、他4名の東京の団員とともに運動を継続する事を希望したため、週1回集会して補導団運動の目的、方針等について学んだ。9月10日、2級団員が誕生し、10月には関東都督の児玉伯爵夫妻が数名の友人両親と共に来団し、入隊式等に参列した。児玉夫人から10個の2級バッジ、4個の幼女隊2級バッジが団員に授与された。当時の団員数は普通団員24名、幼女隊は20名となった。

④1925年8月、第2回のキャンプ生活が計画されたが悪天氣の為に2度延期され、実行時には団員の都合から参加者は3名であった。この時には、大連の少年団の団長によ

る協力があった。カートリツヂ夫人の指導で3日間の天幕生活を行い、「雨の止んだ間に灯の光を頼りに海岸でダンス」、「蠟燭の光を頼りに天幕内で遊戯」をした。

⑤ 11月には維持費—集会所の借賃に200円が必要となったが、団員の所属する高等女学校校長の好意によって体操場を毎火曜日午後3時から4時の間、利用する事が出来るようになった。しかし、少女隊の部屋の維持費を得る為に劇をする事になり、カートリツヂ夫人はグリム童話中の「ランプレスチルツキンを脚色し守瀬夫人が田村夫人と協力して日本語に翻訳」したものを台本に、少女隊の母親たちが衣装を縫ひ上げ12月5日に実演して、1300人の入場者があり純益800円を得た。団を拡張する希望があるが、種々の都合上むずかしい。現在の団員から、指導者が多く成長することを希望する。

以上からは、当時の日本の「大陸政策」と南満州鉄道の交通都市としての大連において、国際都市としての性格から在住イギリス人のカートリッジが指導を担当し、大連高等女学校の生徒と小学校生徒たちの補導団活動が存在し、それを行政監督官であった児玉夫妻が視察し、また少年団日本連盟の総裁であり南満州鉄道総裁でもあった後藤新平、さらに三島陽が訪れていることがわかる。また、少年団との関係は、日常的にも支援があったことが伺われる。

1925年度の団報には、大連の補導団結成時に入団して、その後東京に進学して東京第2組に入団した山縣三喜重から次の報告がある⁸。

大連の日本のガールガイドに就いて

私は昨年三月大連に補導団が始まりました時入団致しまして今年の四月東京第二に這入った者でございます。それで皆様は大連にどんな補導団があるかと云ふ事をお知らせ申したいと思ひます。昨年の三月一日私の居りました大連高等女学校で英国から派遣された英国ガールガイドの支那の団長でいらっしゃるミセス・カートリツヂの補導団についてのお話がありました。私は此の時初めて此の国際的運動のある事を知り大変よい会だと思つて居ましたが、幸ミセスカートリツヂが大連にお住ひになる事になり補導団をお始め下さる事になりました。最初は同月二十五日私共の学校で希望者二十名を募集し練習を致しました。

それから次第に増して八人の班が六組ばかり出来、毎週水曜の午後三時半から学校の近くの双葉幼稚園で一時間半程集會を致しました。其の時は第一に班の整列をして、団旗に敬礼し、君が代を合唱し服装検査（ミセス・カートリツヂの）及び出欠席を班長が調べてそれをミセス・カートリツヂに見ていただき、次に各班に別れて班長が普通団員になる試験の準備を与へ、信号の練習等し、最後に皆集つて競争やダンスを習ひ組の整列をして分れました。此の他毎週金曜の午後四時から一時間ばかり班長の會を致しました。これは次の集會に班に教へる事を習ひ又班の希望を組長に申し上げる機関でございます。

この様にして五月七日に入団式を行ひ、同じく十日には資金を集める為にガイド主

催の音楽会を開きました。其の後は主に二級の試験を受けるために励みました。八月四日から郊外黒石雄で一週間の間ミセス・カートリッジと有志の者十一人と天幕生活を致しました、ほんとうに楽しうございました。其の時の写真は此の間の大会の時皆様御覧になりましたことと思ひます。

今年の夏休には私の他第二東京の団員三人帰連致しましてミセス・カートリッジにお願いカントリーダンスを教へていただいたり自然研究をしたり致しました。

以上は、大連女子補導団の概要について述べた中でも出てくる、手旗信号、ダンス、遊戯と2級試験の準備、東京への進学後についての団員、生徒の立場からの受け止めかたが見てとれる。

なお、大連高等女学校の生徒であり、女子補導団員であった彼女たちの多くは官公吏、職業軍人、商社員、南満州鉄道職員等の家族であったと考えられるが、多くが親の転勤で、さらに本人の進学のため東京に移動していることがわかる。

この点は、1927年度の団員、広瀬遼子による次の報告にも現れている⁹。

大連のガールガイドより

日本のガイド皆様御元気でいらつしやいますか。今日は当地は零下十六度に下りました。北風が烈しく鼻も頬も千切れる程に冷たくてこの冬初めての寒さだと申します。しかし奥地に参りますと、三十度にも四十度にも下りるといふ事ですからまだ私達は元気なものでございます。

私たちの大連ガールガイドもこの三月にはまる四年を数えるやうになりました。私たちの団は大連庁立高等女学校の生徒を中心として居りました団員の方々の中には上級学校を御志望になって日本にお帰りになる方がかなり多く、その為漸くおなれになって色々な方面に御力添へを願はうと思ふ頃にはスッポリと抜きとられてしまひますので、団の発展は中々困難でございます。

ここには、前半での中国大陸での厳冬の様子の報告、後半では高等女学校生徒が卒業後も上級学校進学のために上京することが述べられ、そのための指導上の問題について記されたものである。大連高等女学校生徒の階層的な状況と同時に、大正末期から昭和初期の高等女学校以降の専門学校等への進学率上昇を反映している。

なお、日常の活動は「日曜毎に郊外の星ヶ浦海岸にあるミセスカートリッジのお宅に伺つて、お家の横にある涼しい樹立の下で波の音を聞き乍ら色々なお稽古をしました。或時は信号を或時はパトロールに分れて自由に後にあるお山へ草花の採集に出かけた」こと、「夏三ヶ月の間に集めた草花の中で西内順子さんののが六十種程非常に美しく押花になされましたのでリボンをかけて箱に納めイギリスの本部に送りました。ミセス、カートリッジは『イギリスのガイドがどんなに喜んでくれるでせう』と共に喜んで下さいました」¹⁰とい

う大連の国際的ガイド活動の様子も伺うことが出来るのである。

この年の入団者は13人であり、その内5人はブラウニからガイドとなり、団員合計は38人であった。

以上、多くの団員を擁する大連の女子補導団であったが、1929年度には団長カートリッチ夫人が個人的事情から辞任し、団員中に年長者がいないことから、「指導する適任者を得難く非常に困難」¹¹することになった。日本の在住女性の「田村夫人」が幹事役をつとめることになった。翌、1930年度に次ぎの報告を最後に休止することになった¹²。

「団員十四名、指導者の転出により団は昨年秋以来集会を持ち得ず此の春卒業の生徒にて内地に遊学する者数名あり今後の運動につきては只今協議中にて或は適当なる指導者を得るまでは暫く休会に致すやも知れず何等の発展なきを残念に存じ候」

なお、1931（昭和6）年以降は「満州事変」の影響もあって以降の活動は停止した。少年団の場合、戦時協力の活動が一部にみられるが、大連、長春ともに女子補導団としての活動は停止し、その点は男女で明らかな相違点となっている。

第3節 大阪1組・2組—プール学院（1925—1933）

大阪のプール高等女学校と高等科の組である。1924（大正13）年にイギリスから着任したM. バッグス（Mabel C. Baggs）を指導者として発足したものであり、当初、英語を学ぶ高等科の生徒を対象に第1組が結成され、同様に普通科生徒のための2組がおかれた。学校長のトリストラムをはじめとした外国人教員が運営に協力し、バッグスはその後、徳島の教会に転属となるが、1929（昭和4）年に着任したA. ウィリアムス（Agnes Seymour. Williams）、加藤文子等の指導によって補導団活動は継続された。その後、プール女学校の高等科の廃止にともない第1組は活動を停止し、高等女学校普通科生徒の第2組のみの活動となった。ちなみに、バッグス、A. ウィリアムスともに、第二次世界大戦を前に帰国するが、ともに戦後に再来日し、バッグスは徳島のインマヌエル教会でガールスカウトの団を結成し、リーダーとして活躍し、ウィリアムスは戦後もながくプール学院に勤務している¹³。

1925年度の活動について、バッグス自身による日本着任とガールガイドの出発に関する報告をまとめてみると次の通りである¹⁴。

①バッグスは1924（大正13）年、9月26日に大阪のプール女学校に赴任した。彼女がイギリスでガールガイドの指導者であった事が生徒の間に知られるようになり、彼女たちは補導団活動に関心があったため、高等科に1組を結成することになった。バッグスは日本語を理解できないこともあって、第一に、高等科の英文科の生徒を集めて組を作る事になった。

②教員2名の協力によって、必要に応じて通訳をしながら活動がすすめられた。1925年時点で、26名の団員が在籍し、3つのパトロール班（スウィートピー、勿忘草、桜）が組織され、1925年度は7回の集会が行われている。全団員が初級のテストを通過し、

3の誓いをたててバッヂをつけることになった。

1926年度については、普通科生徒による第2組が始められ、第1組とともに活動していることが報告されている¹⁵。

1927年度は、バッグス自身による次の報告があった¹⁶。原文は英語での投稿であるため、概要を翻訳すると以下の通りである。

尼ヶ崎より

担当するガイドたちにこの団報のために何か書いてもらおうと思ったが、彼女たちは試験で忙しいため二つの組のことについて報告をしたい。大阪1組は16名の団員で、救急法、看護法を教えているが、まだ彼女たちはバッヂの取得にはいたっていない。また、彼女たちはイギリスのダンスと歌も学んでいる。大阪の組ではイギリスの2つの組と文通を行い、イギリスからは定期的に機関紙や手紙が送られてくる。それによって、ガイドは世界を通じた大きな姉妹であることが感じられる。大阪のガイドたちはアメリカ、イギリスのそれぞれのガイドたちと文通を行っており、お互いにやりとりする手紙、絵葉書、写真についても強い関心を持っている。先日は、中国からの訪問者もあった。

昨年4月は、数名のガイドをつれてテントではなく家を使ってキャンプのような試みを行ったが、あいにく雨だった。しかし、彼女たちはガイドとしての笑顔を忘れなかったし、調理、遊戯、ガイドの精神、なにより偉大な理念について互いに学ぶことが出来たと思う。

大阪2組は、現在約30名であり、何人かは特別の試験のためにがんばらなくてはならない。彼女たちは、2級バッヂ取得のために努力しているが、多くのメンバーが今期の終りまでに取得してもらうことを願う。

大阪第1組、2組 組長 M. バッグス

以上からは、救急法、看護法、信号、キャンプを通じてガールガイドについて学び、海外との文通等の交流を行い、あわせてバッヂ取得の準備を行う活動の様子が理解される。

1928年度になると、大阪では組長ミス・バッグスが転任し、ミス・ウィリアムスへの交代が報告された¹⁷。

1929年度の大阪第2組の報告要旨は次の通りである¹⁸（高等科の廃止によってこの年度から第1組の報告はない）。

①夏に15人の新入団員があり、大阪2組は計54人、そのうち2級団員は6人であり、10人が取得準備をしている。出席良者は13人で星印がつく。

②学校の時間の都合で生徒の時間の余裕が少なくなり、夏からは、学校のYWCAの集会と交代で集会をしており、2週に1度、水曜の午後に行く。補導団は事業の一致をはかるため、「学校のYWCAの支部の様」になっている。

③道妙寺の川のそばで火をたき、栗やお芋を煮たりお茶をいれて楽しい時を過ごした。事

④高等科が廃止になったため大阪第1組がなくなつたのは残念である。

⑤OG でもある加藤ふみ子が指導者として協力している。夏には、3人が箱根の補導団全体のキャンプに出席した。

1930年度についての報告は下記の通りである¹⁹。

①普通団員30人、指導者6人で活動している。

②毎週水曜日、午後2時半より3時半までの1時間をガイドの時間とする。この時間は、学校YWCAの一部であるため、YWCAの総会、その他の催しがある時は、ガイドもそれに参加する。3学期は短く学校の催し物その他の都合で、1月からの集会は1回であり、3月まで1回でも多くガイドとしての集りをしたい。報告自体、残念に思っているが、生徒たちも用事が多く原稿が集らない。

1931年度は下記の4点である²⁰。

①団員は第2級のテスト項目について研究を続け、特に信号を努力している。指導者は第1級団員となる準備をしている。

②11月23日には、海辺に出かけて飯盒炊飯をし、芋、玉子を料理して食べた。その時西の宮のボーイスカウトと互いに挨拶を交わした。

③イギリスのガールガイドから寄附金をもらい、それを資金にして団員で大阪市外で毎週土曜日の午後の多様な稽古をするつもりである。

④副組長の加藤文子が病気のため休養している。

1932年度は次の報告があった²¹。

①土曜日午後1時に集会をする。隔週の開催であるが、とくにテストをうけるために必要な練習をしている。

②最近では手旗信号の練習に力を注いでいる。

③新鮮な空気、自然研究、火のたき方等の練習のため出来るだけ郊外に出る事を望んでおり、土曜日の午後から2度近郊に出かけて集会をした。

1933年度は、大阪のプール女学校からは最後の報告となった²²。下記にあるようにミス・バグズ以降に主に組を担当していたミス・ウィリアムスのイギリスへの一時帰国、加藤文子の病気、戦時体制の進行等も背景にはあるが、翌年、室戸台風による被害が多大なものであったこと、とりわけ生徒の犠牲者をとまなう学校校舎の倒壊によってほとんどの課外活動が停止したからである。

私共の組長ミス・ウキリアムが先年夏御帰英になり大変淋しくなりましたが、団員は熱心にお集りを続けて居ります。集会は毎週土曜日午後一時より二時まで時間勵行で致して居ります。近くでは集会時を三回程利用いたしまして学校の看護婦さんにお願ひし、衛生方面の事を実地に教へていたゞきました。昨年末は気候、時間の関係で郊外遠足を催す事が出来ませんでした。その費用を以て毛糸を買ひ、集会の時に靴下等をあみクリスマス時に孤児院に寄附いたしました。

以上、大阪のプール女学校では、1924年にイギリスから着任したM. バッグスを中心に、英語を学ぶ高等生徒を対象に第1組、普通科生徒のための2組がおかれ、普通組のみで最大時で54人という大きな活動であった。ボックスの転属後もA. ウィリアムアス、卒業生の加藤文子等の指導によって補導団活動は継続された。その後、高等科の廃止にともない第1組は活動を停止し、高等女学校普通科生徒の第2組のみの活動となり、救急法、看護法、信号、キャンプ、海外との文通等の交流活動、あわせて上級団員資格、技能バッヂ取得の準備を行うが、高等女学校のカリキュラムの繁忙とYWCA等の行事によって集会時間の調整に難渋していることがわかる。加藤文子の病気、A. ウィリアムアスが一時帰国、戦時体制の進行等も背景にはあるが、1934年の室戸台風の深刻な被害を背景に活動を停止している。

補注

大阪では、1929年度に四島セトルメントでの団活動の試みが報告されている。1929（昭和4）年、大阪四島セトルメントの大泉清子が指導者であり、日曜学校のクリスマス連合等で活動したものであった。報告内容は次の通りである²³

拝復度々色々とお手数をかけまして誠に有難く感謝致して居ります。こゝの集りは、日なほ浅く、人数も少くして振ひません。私の熱心も且少く、力もなく経済も乏しく、三拍子揃ひの誠に貧弱なガイドでございます。併しこの近所の子供は大変団結心に富んで居ります。働きとして別段ございませんが、日曜学校のクリスマスの連合の時色々とお世話やお手伝をさせていただきます。教会の夫人部のバザーの準備又は食堂の給仕やら売店の売子、又教会の手助け、幼稚園の子供の手技の仕上げなど色々としつゝ活動して居ります。

社会に向かつてまだ働くのは前途がございませう。ピラ撒きをして得た労金にて大阪中の最も貧しき人の病院、済生会病院に花など持つて見舞ひに行きます位なものです。私の力が不十分な為又時々病気で欠席したりしますので思ふ様にはなかくまみりません。子供も小さうございます。高等小学生が二人、小学四年生以上四五人位です。入団希望者も今のところございません。まだよくガイドそのものがのみ込めない様です。時々テストを致してみてもわかります。毎火曜日には夜七時から八時半まで開催して居ります。なかくよく服従し奉仕をよろこびます。

セトルメントは、1870年代、イギリスの経済学者、牧師であったトインビーによって始められた貧困に直面した労働者の環境改善と教育普及を目指す運動であり、日本では1897年に片山潜による神田三崎町のキングスレー館が最初と言われている。四島のガイドについて詳細な記録は見られないが、大阪の四島地区でセトルメント活動が行な

われ、その中にガールガイドが位置づいていたことは、それまでの女学校、教会での女子補導団とは異なるガイド活動が実施されていたことを意味するものである。

第4節 盛岡第1組—盛岡聖公会（1927年—）

盛岡の場合、後述する地方都市も同様であるが、聖公会系列の女学校はなく、教会と経営する幼稚園、保育事業と密接に関係している。その点は、東京、大阪、神戸とは異なる点である。また、地方の少年団活動との関係も存在する。以下、盛岡の補導団の背景から確認してみたい²⁴。

盛岡市と日本聖公会の関係は、明治中期、北関東教区のマキム監督の依頼で名出保太郎（後の大阪教区監督）が伝道説教会を行ったこと、青森聖アンデレ教会の小林彦五郎が聖餐式を行った記録があるが、定期的集会は1908（明治41）年5月10日、鷹匠小路の借家住宅での、第1回の定期礼拝以降である。地域の知識人であり教育者でもあった長田村補三郎（盛岡高等農林学校教員）等の協力もあり、盛岡における教会設立が決定され、A. W. クックの司祭管理のもとで森録次郎伝道師が定住した。同年には聖馬可幼児会（聖マルコ会）が設立されて主任ミス・ブリストと助手3人による15—30人の幼児教育が行われた。1911（明治44）年に市内の仁王小路に教会が移転した時に「仁王幼稚園」と改称され、その後、ミス・ディクソンの他、幼稚園保母として岡野みつ、千葉みさほが担当した。1917（大正6）年には、アメリカに留学していた村上秀久神父（後、長老）と妻の茂子が着任し、1929年（昭和4）年には、仙台のビンステッド主教によって新礼拝堂の聖別式が挙行されている。以上が盛岡聖公会の概要である。

盛岡については、日本の補導会発足直後である1921（大正10）年の『女子補導会要旨』に次の一文がある。

「我国に於ける本会の運動は昨年より東京と盛岡にて初められ目下普通会员六十余名
少女部会員二十余名を有す又近く入会せんとして準備中のもの若干名あり」

以上からすると、1920（大正9）年から補導会活動として発足されていたことになる。当時、盛岡聖公会には聖馬可会（マルコ会）さらに仁王幼稚園があり、ミス・ブリスト、ミス・ディクソンの女性宣教師と保母が存在していたことから、彼女たちによるものと考えられるが、担当者、内容を確認するべく記録は未見である。

盛岡1組の概要としては、教会の村上秀久、村上茂子夫妻が担当し、後、岩泉みどり、松岡（坂本）良枝が指導者となった。補導団本部との連絡により、1927年に香蘭女学校に勤務して東京1組を担当していたウーレー、ヘールストン、さらに香蘭卒業の櫻井国子が参加して発団式を行っている。少年団盛岡地方連盟松岡直太郎が協力している。盛岡少年団の高橋栄造は活動視察のため、1928年に香蘭のヘールストンを訪問している。

なお、先述したように、補導会時代の1920年、盛岡で組結成の記録がある。

盛岡の女子補導団に関する明確な記録は、1927年度の櫻井国子の報告からである²⁵。櫻井の記録をもとに、盛岡第1組発足の様子を確認したい。櫻井国子はミス・ウーレイ、

ミス・ヘールストンとともに、1927年4月に盛岡を訪れ、入団式の様子、さらに盛岡少年団の後援、協力について具体的に記述している。概要は、

①4月1日、ミス・ウーレイとミス・ヘールストンと櫻井は上野から夜行列車で昼前に盛岡に到着し、駅には地元の関係者、ボーイスカウト、さらにガールガイドのメンバーがいて、新聞社による撮影もあったこと。

②到着したホテルでは、ボーイスカウト・メンバーの対応を受け、昼食後は少年団の団長の案内によって、市内の城趾公園で翌日の入団式の準備を行い、『石割りの桜』等の市内の名所を見物し、「大きな橋のところ」で「沢山の可愛い少女達が、少年団の方々にとまなはれてお迎ひに来て」²⁶いたこと。

③入団式の準備として、「紐結び、規則の暗誦等、いくつかの環になつて少年団の方々やミス・ウーレイ、ミス・ヘールストン等がテスト」²⁷を行い、団歌を斉唱した。

④「盛岡の少年団と女子補導団は実に一家のやうな感じ」であり、「ボーイスカウトの方はガイドの方々をお兄様のやうに親切に、熱心に色々教へ導き、小さなガイドは何でもスカウトにきく、云はれるとほり」²⁸活動していたこと。

⑤散会后、少年団盛岡地方連盟理事長でもあった松岡直太郎の案内で市内見物を行い、「市役所、銀行、新聞社」、国産陳列場で南部鉄瓶、馬の絵葉書等、さらに人形大使が盛岡市に到着していたことから「アメリカからお使ひの沢山の人形」²⁹を見学した。

⑥4月3日、日曜日はガイドの案内で聖公会の教会で礼拝をし、午後2時頃から入団式を行った。櫻城小学校の校庭の校庭には、少年団員が各々組旗をもつて集まり、ガイドになる少女たちはスカウトの日章旗について土手に馬蹄形をつくった。多くの少女が、契約を唱え、三つの葉の徽章を胸に付けて補導団員となった。終了後、バーンバツグ、リレーレースの遊戯をし、最後に写真撮影を行った。

⑦帰路では、盛岡構外にガイド、スカウトが整列して補導団の団歌、少年団の団歌を歌って送った。松岡直太郎の娘である良枝とウーレイの写真が新聞社が撮影した。

以上が櫻井による要旨である。同年、盛岡女子補導団第一組団員として松岡良枝は下記の一文を寄稿している³⁰。

君が代は千代に

八千代にさゞれ石の……

と一同で合唱した居る間に国旗が掲揚されました。アト見ればウーレー先生もヘールストン先生も、櫻井先生も三指の礼をして居られました。此の時迄私共は未だガイドではありませんから、普通の敬礼をして居たのでした。

愈々問答が始まりました。私共は班長さんに連れられてウーレー先生の前に出ました。そして三つの契約をしました。先生は三ツ葉形の徽章を私共の胸に着けて下さいました。三指の礼をして元の位置についた時、これで自分もガールガイドになつたんだといふ嬉しさと誇らしさは止度なく湧いて来るのでした。

いろいろな競技をしてゐる中にもう十年も前からの様な親しさになりました。それ

からウーレー先生より色々な良いお話を聞かしていただいて、家路についた頃はもう夕暮時でありました。

これは昨年昭和二年四月三日盛岡女子補導団発団式当日の思ひ出であります。

1928年度の報告には、少年団指導者でもあった松岡直太郎にかわって、聖公会盛岡教会の村上茂子が当面の指導を担当する事になったこと³¹、同年の本部記録には、盛岡の補導団との関係について櫻井国子から次のような報告があった³²。

①1928年5月、盛岡のボーイスカウトである高橋栄造が補導団本部視察に上京した。途中大宮で現地の補導団と交流した後、芝の香蘭女学校のミス・ヘールストンを訪れ、東京第一組の土曜の集りを建学して組長副組長から聞き取りをした。

②約一週間の東京滞在中、林富貴子総裁、桧垣茂、東京の少年団を訪れ、状況と写真・資料等を調査・確認した。

③その結果、本部では地方関係者、補導団以外の希望者のために団報の充実を検討することになった。アメリカ合衆国ガールスカウトの『アメリカンガール誌』は、一般の少女雑誌となっており、参考としたい。

④盛岡の女子補導団は今適当な指導者がいないことを、少年団関係者が心配している。指導者充実のためにも本部の役割が重要である。

この点に関し、同年に少年団指導者の松岡直太郎は次の点を報告している³³。

①5月下旬から6月上旬にスカウトである高橋栄造が大宮、東京等を訪問して厚遇を受けた。大宮の指導者、東京でミス・ヘールストン、桧垣茂等、また林総裁と面会できた。

②盛岡のガイドは試行錯誤を繰り返しながら活動している状態であるが、これを維持、発展させていきたい。ミス・ウーレイ、ミス・ヘールストン、櫻井国子が盛岡で発団式を行ってくれたことに感謝している。

③「ブラウニは今は相応に成長して居る」が、「学校の課題は予想以上に多く殆ど寸暇のないためガイド訓練の余裕のないのに困って居る」³⁴。

④盛岡ガイドの発祥地は聖公会附属の仁王幼稚園である。ここに、「ミス、デクソンの御指導を受けたといふ保姆が居るのを幸ひ牧師村上さんの御手を煩はして『補導団便覧』を唯一の金科玉条とし僅かの少女を御預かりして」³⁵補導団を実施している。

以上のように、盛岡の少年団指導者である松岡直太郎、高橋栄造らが女子補導団の充実について検討を進めていたが、指導者に適当な人物がいないため、盛岡聖公会の教会牧師、村上秀久の妻である茂子を当面の責任者とし、大正期に宣教師として盛岡に在籍し、幼稚園の経営と補導会時代のガイド活動を準備したミス・ディクソンの下で保姆をしていた女性（岩泉みどり）に指導者とすることが述べられている。

1929年度、盛岡第一組は指導者3人、普通団員12人で活動を行い、本部および、村上茂子から次の報告があった³⁶。

昨年から相変わらず集会をつづけて居ります。毎週土曜日は教会堂のお掃除を致します。右の御報告は非常に簡単で御座いますが次の御通信によつて指導者の御熱心な働き振りがうかゞはれます（本部役員）

（前略）この夏岩泉さんが箱根にまゐりまして一方ならぬお世話いただきまして有難うございました。非常に愉快に有意義な集会の模様を承りまして少なからぬ先生方の御努力を思ひまして感謝いたしました。その後岩泉さんも熱心に補導団員を指導して居ります。お天気のよい日に公園などでやつておられます。そして同氏は非常に興味をもつて居られますから特に東京にて補導団の御催しでもなさる場合には御知らせ下さいませ。出来るだけ都合つけて研究させていただきます。

盛岡にて 村上茂

以上である。盛岡1組の概要としては、もともと、1920（大正9）年に女性宣教師のミス・ディクソンと保母によつて初期の補導会活動が準備、一部、発足していた。

その後、ボーイスカウト運動である少年団盛岡地方連盟指導者である松岡直太郎らによつて女子補導団の発足が準備され、東京からウーレイ、ヘールストン、櫻井国子らが招聘されて交流が始められた。教会の村上茂子が担当し、後、岩泉みどりらが指導者となる。

地方少年団が活動発足・運営に協力した事例であるが、1930年度以降の報告、活動記録はない。活動停止の背景には、引用資料中にもあったように、団員たちが学校の都合から多忙であること、指導者不足の問題、さらに昭和恐慌と冷害等の問題の他に岩手聖公会と仁王幼稚園経営を担っていた村上秀久、茂子夫妻の公私の多忙さ等が考えられる³⁷。

補注

岩手県は、1910（明治43）年に和賀郡藤根村に高橋峰次郎が少年真友会を結成し、1915（大正4）年には、全国でも最初に大日本少年団に加盟したのをはじめ、同年の佐藤総吉を代表とした梁川少年団（現江刺市）、1919（大正8）年の江刺郡の玉里少年団（菊池和太郎団長）が結成され、日本の少年団運動の初期からの活動をすすめていた。1922（大正11）年に結成された少年団日本連盟の初代総裁に水沢出身の後藤新平が就任したこともあって、同県内の少年団運動の充実がはかられていった。

1926（大正15）年10月15日には南部利淳を代表者として盛岡少年団連盟が結成されている³⁸。文中の松岡直太郎はその常任理事であるが、彼が準備をすすめた女子補導団の盛岡第1組の結成はその半年後のことであり、盛岡少年団連盟の早期の活動の中に捉えることもできる（一部の記録には、1927年4月3日に結成されたのは「善友少年団女子部」³⁹と記録されている。

また、盛岡聖公会と岩手県の行政関係者との関係について述べれば、大正末に岩手県知事となった得能佳吉の妻が北海道時代にアイヌ伝道を行っていたバチェラーの指導を受けた人物で、盛岡時代も聖書研究会を開催して教会にも通っていたこと、また知事自

身も後に受礼して親交があったこと、があげられる（昭和初期の丸茂知事の妻も同様であった）。また、村上秀久牧師がアメリカ合衆国の留学経験があったことから、盛岡中学、盛岡高等女学校、盛岡商業等で英語の授業を担当したことも多くの若い世代と交流する契機ともなっていた⁴⁰。盛岡という地方都市で、聖公会の活動である女子補導団活動が目された背景には、行政関係者の一定の理解と少年団というボーイスカウト関係者の協力があつた背景として確認しておきたい。

なお、盛岡のガールガイドは、各小学校での女子青年団組織（少女団）に影響を与えている。松岡直太郎は『女子補導団』誌上に女子補導団とほぼ同時期に盛岡市内の各小学校に女子青年団結成を働きかけたことを述べた上で次のように報告している⁴¹。当時の地方の少年団指導者の一意見であり、補導団活動から学校少女団への示唆でもあるが、当時の少年団関係者のガールガイドに対する考え方を示すものでもあり、下記に引用しておきたい。

私は今此の連合に関係して居るのですが時々女子青年団の総会の席上で次の様な事お話しして満堂を笑はせた事があります。女子青年団と云つても単に生花とか裁縫とか割烹とか其他何々と知的講習をするばかりではなく何うしても補導団の訓練法を取り入れなくてはならぬ。諸子(女子青年)は若し猛獣(痴漢のこと)などに出会つた時長刀とか柔道とかを知つて居れば幸ひだがそれよりももつと護身用として知つて置きたいことは信号である。又縄結び法である。諸姉はかゝるとき『アレー』と叫声を發するよりもモールスで同志に伝達した方は遙かに有効ではあるまいか、漁夫の妻女は信号で沖に居る夫君と所用を弁じて居るのを見た事がある云々、まだ沢山例があります。

当地の青年子女の中にも補導団の訓練法の必要な事を認めるものがポツク出て来たのは嬉しうございます。但団を經營するのは矢張男子が必要であります。ガールガイドングは今少し男子を取入れることをお許し下さらばモツトくガイド運動が發展するでしょうものを。

第5節 大宮第1組—大宮愛仕母学会（1927年—）

大宮第1組は、1927（昭和2）年に大宮の桜木町にあつた保育者養成機関である愛仕母学会で結成された。大宮愛仕母学会は埼玉県の幼児教育の先駆者であり、川越初雁幼稚園を整備し、さらに大宮愛仕幼稚園、毛呂山愛仕幼稚園等を開設したアメリカ人の女性宣教師アプタン（Miss. Elizabeth Florence Upton）が開設した。県内の幼稚園を整備する一方で、そこで実際に幼児教育を担う人材の育成を目指したものであり、アプタン自身の直接の関与は戦後のガールガイド時代からであるが、大宮1組のガールガイド団員の中心はこの在學生と卒業生たちであつた。組長は、幼児教育のリーダー的存在でもある桜井（大越）房子、加藤きみ子であつた。桧垣茂、井原たみ子等が指導に訪れている。

1927年度、結成の経緯の報告概要は次の通りである⁴²。

1927（昭和二）年11月3日、埼玉県大宮町の愛仕母学会に1組は生まれ、東京から桧垣茂、竹井富美子、井原たみ子、が出席して入団式が行われた。百合6人、マーガレット6人の2班から構成され、桜井房子が組長、岡田漱枝が副組長となった。

その際、入団に際して次の感想が寄せられている⁴³。要約すると下記の通りである。

①白百合班員

3つの契約、10の団則、他にない規則である。団則契約にしたがって一生懸命に励みこの団を知らない女性に一人でも多く知らせ、そして大宮全体の女性にこの福音を伝えたい。信仰を持ってやれば出来ない事はない。

②マーガレット班員 柳川義子

入団式がすんで、私共は大宮第一組補導団員に入団することが出来た。10の団則と3つの契約を固く胸におさめ、日常生活に活用し、いつも団服を着た心地で道を歩むにも家庭においても実行しなければならない。そして大いに国家社会に尽くす心掛である。

③白百合班員

補導団に私たちも入団を許されてうれしい。主の僕となって社会のため神のため真心から一致して働きたい。

④白百合班員

天父の御恵により補導団が昨年11月大宮に始めてひらかれた事を感謝している。教員と生徒一同一時に入団出来た事を喜んでいる。何事をなすにも全能の神の御前にあつてする事を知り、神の御栄を表す事の出来るようひたすら祈っている。そして全にこの補導団のため、神の御国建設のため共に働きたい。

⑤白百合班員

私たちの学校の精神目標と補導団の精神とに深い一致があつた。私たちに神様が補導団というよい親友を与えて下さった。私たちは神様の御国をひろめ、一人でも善良な子どもを養成して神様の前に捧げる事の出来るよう勉強している。入団式に約束した3つの契約、団則を考えると励まされる。私たちの組が多くの暖い手に導かれ幼い子どもの補導者、未信者の補導者に真の補導団員として努力する事の出来るようお励まし下さい。

⑥某

私は昨年の11月補導団の国に生れた者である。大宮に開かれた補導団、ちょうど暗黒の中からのかすかなこの光を以って進み明るい国を造りだしたい。また、これとともに神の僕となって栄光のために励み、常に補導団員である事を自覚し、良き姉妹となる事が出来るよう努力したい。

以上である。1928年度には、本部から「一番若かい大宮の組は誠に好成績に成長して居られます」⁴⁴、という報告があるが、愛仕母学会は全国の聖公会教会から推薦をうけた生徒を集めた幼児教育機関であったこともあり、他の補導団と比較して教会活動の中、あ

るいは並行したガイド活動の意味があったことがわかる。

また、同年には本部団員の佐々木逸子から大宮1組の組長である桜井房子が結婚して大越姓になったこと、その上で大越房子の手紙と結成1周年の写真が送付されたことが紹介されており、その内容は下記の通りである⁴⁵。

『当団員も常に実生活にとつとめつゝ新しい年と共に一歩づゝ理想に向うて参り度いと日夜祈りつゝつとめて居りますが御承知の如き小さな田舎の事とて仲々はかばかしく御座いません。今後はなほ一層皆々様方の御指導を受けて出来得るかぎり愛のはたらきをと希望致して居ります次第で御座います。御大典記念としても当地の団員等は金品を以て貧しい人々を賑はす事は六ヶしう御座いますからそれに代へて労力をわずかづゝ捧げ度いと存じて居りますがその事も只今まで実際に始められて居りませんその仕事をも種々考へ中で御座います故、これ又好き御考へが御座いますならば御教へ頂き度う御座います団の皆様を何時も思ふ許りで御無沙汰致して居ります故くれくもよろしくお伝へ遊ばして下さいませ』

1929年度の報告では、次ぎの点が報告されている⁴⁶。

- ①大宮第1組は、普通団員14人、指導者3名であること。
- ②この年に卒業等で、5人が地方に移動したが、6名の新団員加入があったこと。
- ③指導者1人が箱根で開かれた補導団の指導者のキャンプに参加したこと。

1930年度の報告は次の通りである⁴⁷。

- ①構成は普通団員21人、指導者1人であること。
- ②1930（昭和5）年4月に5名が就職等で地方に移動、退団したこと。
- ③1930年7月9日に、ミス・ウーレイの訪問、指導があり、入団式を行って新団員12人が加入した。式後にミス・ウーレイは「数種のむすび方及ゲーム」を教授した。
- ④毎週水曜日午後集会を行うが、規則的に集る事が困難である。

1931年度は次の点が報告されている⁴⁸。

- ①1931（昭和6）年3月までは21人の団員と指導者であった。
- ②しかし、同月末に6人の団員が卒業等により地方に移動した。
- ③組長の桜井房子の病気と転地療養によって、毎週金曜日に開催の集会中止の状況も生じた。大宮の場合、愛仕母学会の学校生徒であるために毎年、新入団員が存在する一方で新団員も加入する。このことは、団の種々の訓練になれた頃に卒業という課題もあるが、卒業生が他地方の幼稚園勤務とブラウニの発足という成果にも結びついている。

1932年度は、組長の桜井房子の転地療養が継続していること、集会は毎月第1日曜日の午後1時からであり、12人の新入団員の2級試験準備等が報告されている⁴⁹。大宮第1組からの報告は同年が最終年度となり、その後は特に記録がない。報告にもあったように地方の教会から推薦された在校生徒たちの団活動ゆえに、宗教的意味、教育活動への関心自体が高く、毎年、新入団員がある一方で、卒業、帰郷あるいは就職による継続性の課題があった。同時に、大宮第1組のメンバーは、後述する日光、久喜等の幼稚園でのブラ

ウニ活動の発足、経営にも協力していることを付記しておきたい。さらに、大宮第1組の活動は、戦後はアプタン自身もふくめた戦後の埼玉県ガールスカウト運動の中心にも連続していくのである。

補注：

E. F. アプタン (Miss. Upton, Elizabeth Florence・1880－1966年) PE・アメリカ聖公会、は生涯のうち半分以上の期間を日本で生活した。聖公会の女性宣教師として来日したが、幼児教育においては埼玉県においてその基礎を築いた人物でもある。彼女自身がガールガイドに直接関わった記録はなく、むしろ戦後のガールスカウトになってからの協力であるが、戦前の大宮1組のメンバーはその教え子たちである。アプタンに関する伝記的著作、および研究をもとに、彼女の足跡について説明しておきたい⁵⁰。

アプタンの先祖はフランス北方のノルマンディーの有力な貴族デュピタン家がであり、同地にも今もなおアプタンの名が残っている。1632年、アプタン家はアメリカのマサチューセッツ州のサレムに移住した。アプタン女史の祖父は南北戦争において北軍の将軍として活躍し、また「アメリカ軍事法典」の著者として有名であった。アプタンの母方の祖先は、ペリー家であった。物理学を学んだ父のF・アプタンはエジソンの友人であり、大学教授の職を辞することにした。発明王エジソンに協力し、大規模の電球製造工場を設立し、数百人の職工を雇って、事業は発展した。

1880年生まれの E. F. アプタンは、早くに母を亡くし継母のもとで成長するが、6年間市立学校に教育を受け、その後、1895年に父の仕事の都合でピッツバークの町へ移転し、彼女はこの地のハイスクールに転校した。その後、サメット・ニュージャージー州のケントプレーズにある父親の友人の創立による大学の寄宿舎に入り、2年間ここで学んだ。1899年には、アメリカ最初の女子大学であったバツサー大学に入学し、1903年、には同大学を卒業した。彼女はグレイス教会の日曜学校の教師となり、友人と共に身体障害者の救済と生活指導を行いその代表的役割を果たした。

その後、アプタンはヨーロッパに留学することになり、イギリスでは、伝統的な生活、風物、田園生活を経験し、フランスではソルボンヌ大学で美術を学び、イタリア、ギリシャでは、歴史的な名所・旧跡・宮殿・教会、一流のオペラの観劇等々を見聞した。1906年にはフランスからドイツに移り、ベルリン大学に籍をおいて新約聖書神学を学んでいる。

E. F. アプタンが来日したのは、1908（明治41）年のことであった。少女時代から電球のフィラメントが日本産の竹で出来ていることを知り、日本に強い関心を抱き、それが日本伝道への熱意となった。すでに埼玉県川越で伝道活動を行っていたミス・ランソン、ミス・ヘーウッド（バツサー大学の先輩）の元で活動することになり、彼女は自費で日本渡航を決意し、3月に川越に到着した。川越キリスト教会は日本聖公会の地方伝道における最古の歴史をもっていたが、まもなくミス・ヘーウッドは立教女学校の校

長として東京に移動し、ミス・ランソンは仙台の女子神学校（後の青葉女学院）へ転任となった。1908年（明治41年）8月は、E. F. アプタンはその後を受けて初雁幼稚園の園長としても働くことになった。

1910（明治43）年8月、関東地方に大洪水があり、荒川沿岸の被害は大きく、惨状を極めた。この時アプタン女史と軽井沢にいたが、急報を受けてミス・マータンとともにただちに川越に戻り、荒川東岸の並木村に託児所を開設し、それは、小さな幼稚園を始めるきっかけとなり、さらに聖公会熊谷幼稚園を設立することにもなった。

1911（明治44）年、浦和へ移動し、県庁の近くに定員20名の幼稚園を開設した。この時、埼玉県知事の妻が正式な手続きなく子どもを入園させようとしたことに対し、アプタン女史は定員に達していること、願書締切期日が過ぎている理由をもって入園を許可しなかった。この事実は、浦和市内に広まり、アプタンの姿勢と幼稚園の存在が認められる契機となった。

1914年にアプタンは大宮を訪れ、大宮が鉄道工場を中心に活気溢れた若い勤労者の多い町であることを知り、ここに伝道と幼稚園の働きを始めた。大宮における最初の幼稚園を開設することになったのは1915（大正4）年である。アプタンは幼児教育の重要性和キリスト教の信仰にもとづく幼稚園教諭養成の必要性を考え、1916（大正5）年、イギリス、アメリカで養成準備のため幼児教育の諸問題について研修した。

1917年（大正6年）日本に帰任したアプタンは大宮に住み、川越・浦和、大宮、その他の各幼稚園園長として、保育者の指導に当たり、幼稚園教諭を養成する愛仕母学会創立の準備を進めた。併行して、川口、鳩ヶ谷に幼稚園を設立され、彼女の活動は埼玉県下に拡大されて保育者養成は急務となった。しかし、学校設立は大事業であり、日本聖公会には仙台の青葉女学院、名古屋の柳城保母実行学校があるため認められず、結局、1923（大正12）年4月に自費を投じて愛仕母学会が開設された。アメリカの友人からの送金で学生寮を建設し、学生たちの寮生活が始まり、学校の形が整えられた。愛仕母学会における幼稚園の教師養成はアプタンの強固い意志と信仰によるものであり、これ以降、学生は各地の教会から牧師の推薦によって集められた。

愛仕母学会の幼稚園教師の養成課程は2コースがあり、1つは高等小学校卒業者の3年制のものと、他の1つは女学校卒業者の2年制のものであった。このほかに、聴講生の制度があり、結核療養所の軽症者なども聴講が許された。講義ではアプタンは旧・新約聖書・児童心理学、英語など、直接保育方法・保育技術に関係のない科目を担当した。

なお、アプタン女史は園児の母親の啓発のために「母の知恵」第1部から第6部の小冊子を作り、これを配布した。授乳方法から沐浴など育児の具体的方法が書かれ、衣服の製作方法まで記述されている。

〔愛仕母学会の講義内容〕

科目	担当者	科目	担当者
旧新約聖書	アプタン	裁縫ト作法	田中正喜
児童心理学	アプタン	書道	五島千嘉子
英語	アプタン	国語	清水ふさ
礼拝学	駒野司祭	お茶・花	渡辺・金杉
音楽	ミス・ネリ・マキム	修身・理科	小学校・中学校教師
	土肥文子	歴史・地理	小学校・中学校教師
保育学	大越房子	教育	
日本画	臼 英玉		

【愛仕母学会の年度別の学生数】

回生	学生数	回生	学生数	回生	学生数	回生	学生数	回生	学生数
1	11	2	3	3	3	4	3	5	8
6	6	7	8	8	9	9	4	10	8

愛仕母学会は、第1期の学生が1926（大正15）年3月に卒業し、1936（昭和11）年の第10期生の最後の卒業まで合計63人を輩出した。

1925（大正14）年4月、アプタンは埼玉県比企郡松山に聖ルカ幼稚園を設立し、自ら園長となったが、その際の主任は第1期生の岡田敏江であった。

1926（大正15）年4月、幼稚園舎と礼拝堂が大宮、桜木町に建設され、この幼稚園は聖公会幼稚園と命名された。同年には、与野愛仕幼稚園を設立、愛仕母学会の卒業生加藤きみが主任となり、愛仕母学会で学ぶ生徒の実習の場としても重要な場となった。なお、長野県軽井沢町に聖公会幼稚園が設立された。アプタンは川越時代に、乳児を養子として育て、さらに愛仕母学会の卒業生を教師にむかえ、愛仕あそび会及び毛呂山愛仕幼稚園の創立している。

1939年、第2次世界大戦がはじまるとアメリカ大使館から帰国勧告を受けた。留まる決意が強かったものの1941年に帰国し、戦後に再来日し、1958年には勲五等端宝章、さらに、大宮名誉市民となっている。1966（昭和41）年7月2日逝去、85歳であった。

第6節 福島第1組—片曾根村農業公民学校（1929年—）

福島第1組は福島県片曾根村農業公民学校での活動である。1929（昭和4）年に活動を開始し、1931年までの活動継続が確認されている。指導を担当したのは浅井、渡辺芳子の両名である。

1928年度の女子補導団報に、本部からとして、次のような報告があった⁵¹。

福島市では昨年来我々の団にならつて集会を初められましたが中々困難が多くて困つて居られるとの御同情は申て居りますが遠方の為御援助も出来ず残念に思ひます。今年はどうか団が成立して私共の御中間入りをして戴き度と希望致します。

これによれば、1928年度、福島において補導団の集会準備が行われており運営に関する援助の要請が伺われる。それに応ずる形で、1929年度の入団式の記録がある。

入団式は、1929年9月21日、香蘭女学校で行われた。福島から渡井芳枝に引率された農業公民学校の生徒が上京し高松宮邸でのキャンプ参加の後、香蘭に向かった。檜垣茂、ミス・ウーレイが入団式を担当し、溝口歌子、徳川恵子が補佐した。生徒たちは、ヘルストンの寄宿舎に宿泊している⁵²。

なお、1929年度の福島第一組の現状報告の概要は次の通りである⁵³。

- ①構成は、普通団員6人、少女部団員6人、指導者1人。
- ②9月18日－26日まで、東京、三浦半島方面に旅行。
- ③11月22、23日農産物（家庭実習）品評会、裁縫手芸品展覧会開催。
- ④毎週火曜日に集会を開き、団の遊戯と訓練をしている。

同1929年の機関誌『女子補導団』の本部記録にも次の記録がある⁵⁴。

八月廿九日 本部役員福島県滞在中田村郡片曾根農業公民学校教師渡井芳枝氏の入団式挙行

九月十六日 本部役員会

九月廿一日 香蘭女学校に於て福島県田村郡農業公民学校生徒十五名の入団式を挙行

この日程からみると、指導者である渡辺芳枝の入団手続き後に、農業公民学校の女子生徒の入団式が行われたことがわかる。福島1組の場合、地方の農業公民学校女子生徒による組という特異な例であるが、1931年度の本部報告には「福島第一組は指導者の退職後最近本部との連絡がなく明確な団員数等知る事が出来ませんでした。渡井氏の後任の方が出来て復活する事が出来ます様希望して居ります」⁵⁵とあり、1930年度で休会していることがわかる。

第7節 長春第1組—長春高等女学校（1929—1931）

長春高等女学校の生徒を中心とした組であり、1929（昭和4）年10月27日に発足した。指導者1人、団員6人で、組長代理を田中富貴子がつとめた。大連女子補導団の5年ほど後の発足となり、活動は1931年の「満州事変」時点まで継続した。

1929年度の報告概要は次の通りであった⁵⁶。

- ①長春女子補導団は、普通団員6人、指導者1人の構成である。
- ②結団式は1929年10月27日に行った（午前10時半から正午まで）。
- ③結団式の内容は、国旗掲揚、君ヶ代斉唱、誓約朗読、宣誓の式、風輪氏の訓辞、健児

団森先生の祝辞、一同の記念撮影、国旗降下、後一時間半室内での茶話会、最後に全員で補導団歌を合唱して散会した。

④結団式には保護者、来賓の出席者が全部で30人程度で、気持よく厳かに第1回の入団式が挙行された。その際、団旗が受納された。

⑤その後、1ヶ月間、団員6人による規則を順守した活動がすすめられており、さらに入団希望者あって、近いうちに、10人の中に、仮入団を行いたい。

⑥結氷期に入り、スケートが盛んになっており、集会については、次回から午前10時から正午まで作業とし、午後1時から2時半まで女学校専用の西公園スケートリンクで練習をするつもりである。これから半年間の「冬ごもり」があり、当地では、何よりの戸外運動としてぜひ行いたい。近いうちに団旗樹立式を挙行する。

⑦入団者は松岡富美子、松岡翠、畠山哲子、是枝静子、伊藤敏子、吉岡つる、6人である。

以上のように、長春では1929年に長春女子高等女学校を中心に発足し、補導団としての基本的な活動の他に長期の冬に対応したスケート等の屋外活動が奨励されていたこと、また新団員の加入があったことが理解できる。結団式には長春健児団という少年団から挨拶が行われており、指導者については大連のカートリッジのような専門家は存在しないが、田中富貴子という女性が代理でつとめていたことがわかる。

長春女子補導団は1931年度の本部記録に「大連、長春は前者は引きつゞき休会後者は満州事変のためか御返事を得る事が出来ず」という連絡事項以降、活動記録は残されていない⁵⁷。大連においても述べたように、男子の活動である長春健児団が戦時に際して、ボーイスカウトの斥候活動のごとく協力を行ったことと比較し、女子補導団は活動休止を行っている点是对照的である。

第8節 日光第1組・ブラウニー四軒町愛隣幼稚園（1930-）

日光第1組ブラウニは、日光市内の四軒町聖公会付設の四軒町愛隣幼稚園において1930（昭和5）年4月6日に発足した。日曜学校の中等科の生徒が中心で、ブラウニ7人が入団した。ブラウニの一部は日光高等女学校に入学したのち普通団員となった。イギリス人女性宣教師のハンプレ（Miss. Marian Humphreys）⁵⁸、大宮第1組（愛仕母学会）出身の木村里代が指導者で当初は日曜午後に集会を行った。

北関東地区、栃木県の補導団活動について、本部記録には、1928年度に「目下栃木県足尾からも加盟を希望して居られます。新らしく団を組織される所々へ十分に御援助が出来る様ななれましたら定めし姉妹等の数も増し社会の為めにもなられましように目下団として其所まで手が届きませんのは誠に残念では御座いませんか」⁵⁹という記述があり、続いて、1930年度に「地方では、大宮の団員であつた方が日光に新たにブラウニをおはじめになりました」⁶⁰と報告されている。

1930（昭和5）年度、日光第一組の報告の概要は次の通りである⁶¹。

①ブラウニ7人、指導者2名、小人数ではあるが、週に一度の集りに皆喜んで出席している。

②「クリスマスの祝にはブラウニ達の劇として（グリム童話中より）可哀想な靴屋のおぢいさんとあばあさんを散々に喜ばせてしま」⁶²った。

③日光はひじょうに寒いため、ブラウニ達は集りを休むものもいる。

④困難にもたえる明るいブラウニが必要であり、「ブローチ」がより輝くように御励ましをお願いしたい。

1931年度は、普通組、ブラウニからの報告があった⁶³。

①1930年4月6日にブラウニとして入団した少女たちは女学生になったので、ガイドの組に入るための準備している。

②集会は日曜日の午後2時から行っている。ブラウニであつた時より出席は良くない。

③集会ごとに、30分程度、団員の案によって平常の仕事をし、場合によって団員としての奉仕が出来る様準備している。

④ブラウニについては、日曜学校の中等科の生徒が20名ブラウニとして入団した。毎水曜日3時半より3時半まで集会を行う。日曜学校の生徒の多くはブラウニ希望者で4、5人が入団準備中であり、そのうち3人は女学校へ入学予定であり、新団員として熱心なガイドとなることを期待している。

1932年度はブラウニについて報告があった⁶⁴。

①集会は毎週水曜日に3時から4時半くらいまで行う。

②以前より出席率が良くなった。ブラウニ時代は熱心であるが、女学校に入ると時間の余裕がないらしく、出席も少なくなる。ブラウニから補導団にまで進めるようにしたいが、多くのブラウニが生れるのに元のブラウニの影が薄くなることを心配している。

③ブラウニたちは現在、制服をつくる事を喜び、仕事にはげんでいる。

さらに、1933年度のブラウニについては次の通りである⁶⁵。

①集会は毎週水曜日の午後3時からで、冬期は帰校時間が遅くなるため、ゆっくりした気持で集会が出来ない。

②出席数が定まっており、同じブラウニの仲間が同じ気持で歩みを続けられるため、それぞれの希望に対応していきたい。

以上、日光第1組ブラウニは、日光市内の聖公会四軒町愛隣幼稚園において1930（昭和5）年4月6日に発足し、女学校に入学した団員による組も存在した。日曜学校の中等科の生徒が中心で、女性宣教師のM.ハンプレと大宮愛仕母学会出身の木村里代が指導者で集会を行ったものであった。1933年度以降の記録はない。

第9節 沼津第1組・ブラウニー-清水上聖公会（1931年-）

沼津第1組は、清水上聖公会・四恩幼稚園出身者による普通組、ブラウニが存在し、1

1931（昭和6）年秋に活動を開始した。指導者は女性宣教師のエドリン(Theodra C. Edlin)で、日本人の指導者はガイド担当の新藤とし子、ブラウニを指導した村山愛子、南岡春枝、佐藤千代子である⁶⁶。エドリン⁶⁷は、後に香蘭に赴任し東京の組も担当している。四恩幼稚園の卒園者は若葉会の名で英語とゲーム等を行っていたものが発展したものと捉えられる。1933（昭和8）年の1月4日にはウーレイが訪問している。

1931年度の活動について、沼津第一組からは次の報告があった⁶⁸。

私共はまだ昨年の秋にはじめましたばかりでお知らせする事もそんなにございませんが毎週お集りをいたして居ります。三人入団いたしましたはまだ後八名は一生懸命準備をいたして居りますから間もなく入団が出来様と思つて居ります。すでに入団いたしました団員達は看護法をよく研究いたして居ります。

ここには、1931年の秋から3人の団員で始められたこと、入団準備者が8人いること、また、看護法を学んでいることから普通団員であることがわかる。

翌1932年度の報告の概要は次の通りである⁶⁹。

①1932年7月に指導者であるエドリンがイギリスに一時帰国したために組長代理が担当していること。

②最近2名の団員転出があったが、12月3日3人の入団者あり、合計8人が二級団員となる各自熱心に学んでいる。他に3人が入団の準備中である。毎週一度の集会が思うようにできない。

1932年度は沼津第一組ブラウニの説明がなされており、要旨をまとめておきたい⁷⁰。

①沼津のブラウニは四思幼稚園の卒業生によって組織されている。

②幼稚園は1929年4月の創立であり、今年3月に第4回の卒業生を出す。卒業生は、卒業後も毎週水曜日の午後「若葉会」と名付けられた会に出席して英語を習い、遊戯等の集会続けてきた。

③若葉会18人のうちから9人がブラウニとして入団した。

さらに、同年のブラウニ入団式についての村山愛子の報告は次の通りである⁷¹。

①沼津第一組ブラウニ入団式は1932年1月4日、沼津市山王台の四思幼稚園で行われた。

②お正月の第4日目朝10時半に集合準備し、「お昼をお客様とご一緒したいとの希望をまとめて御馳走を作ることを考へた」⁷²。

③エプロンをかけ、ナイフでじやがいもの皮をむき、人参を細く切り、米を炊く用意等々台所は大さわぎであった。部屋の係は掃除、テーブル支度、花生けをした。

④12時過ぎにウーレイの来訪があった。「今日のお客様はウーレー先生の他に南岡先生、ガイドの指導者の進藤先生、幼稚園の佐藤先生、と村山の五人」⁷³であった。

⑤食前の感謝をし、暖かいシチュー、食後の果実を食した。

⑥午後は入団式であり、「一同円くなり、第一に幼稚園の三人の先生が、ガイドの入団式を済ませ、ブラウニは之に続いて入団式を行」った。ブローチをつけ、ブラウニの決心を

して、「二つ三つの面白い遊びの後ウーレー先生から可愛らしいお話を伺ひ一同満された歓びと云ひ知れぬ感激をもって名残り惜しくお別れした」⁷⁴。

エドリンの帰国後のブラウニ入団式について、普通組担当の新藤とし子、ブラウニを指導した村山愛子（後に佐々木正市主教と結婚）、婦人伝道師の南岡春枝、幼稚園教員の佐藤千代子が組を担当し、そこに東京のウーレイが訪問して入団式を行った様子が理解される。

1933年度の沼津一組とブラウニの報告は次の通りである⁷⁵。

①沼津第一組 集会は毎週土曜日午後3時半から行い、致して居ります。11名の団員全部2級となるため学んでいる。とくに手旗信号の練習に集中し、気候のよい時期は道しるべを用いて、海岸に、山登りに、遠足等をする。

②沼津第一組ブラウニ 毎水曜日、午後2時半より3時までの英語クラスに続いて集会を開いている。集りのはじめにお祈りをもつことをブラウニの一人が発言してから、毎回自由祈祷、子どものための祈祷文を用いて祈る。入団式後1年を経て、2級ブラウニの準備をするもの、また、新しい入団予定者、初級ブラウニのために会のはじめは3級に分かれ、その後、共同遊戯等をして4時に散会する。「ジュツ玉細工、ムギワラ細工等」の作業も行っている。

以上のように、沼津第1組は、聖公会の四恩幼稚園出身者による英語を習う若葉会が母体となり、普通組、ブラウニが存在した。発足時の指導者は女性宣教師のエドリンであるが、彼女の帰国後、教会関係者の新藤とし子が普通組を担当し、村山愛子、婦人伝道師の南岡春枝、幼稚園の佐藤千代子がブラウニ運営を担当していたことがわかる⁷⁶。

補注：

沼津聖公会には、1927（昭和2）年から1929年まで伝道師として黒瀬保郎が赴任している。黒瀬の妻は東京第1組（香蘭女学校）第一期生の細貝のぶであり、結婚直後に沼津に着任している。四恩幼稚園が1929年4月に創立し、沼津の補導団の発足はさらにその2年後の1931年であり、沼津の活動に関する細貝（黒瀬）のぶとの明確な接点は見当たらないが、後述するように黒瀬のぶは1932年から転任した茂原で新しい補導団活動を試みており、今後上記の各教員との交流関係を含めさらに詳細を確認したい。

第10節 長野第1組—愛シスター会（1931年—）

長野県小県郡弥津村（ちいさがたぐん、やつむら）愛シスター会を会場とした長野第1組は柳澤けさを、を指導者として1931（昭和6）年に11月3日に発足した。長野県新張少女団とも呼称され、ブラウニ、ガイド志望者に分かれて活動した。1932年8月にはウーレイが訪れ、ガイド32人、ブラウニ29人が入団式を行っている。

1932年度、報告の概要は次の通りである⁷⁷。

①1932（昭和7）年、8月22日、ウーレイが長野を訪問してガイドとブラウニの

入団式が行われ、新しい組が生まれた。入団式の後、ウーレイの指導で補導団についての色々の話、ゲームを学び有意義な一日を過ごした。

②毎月第1土曜日と第3土曜日の午後に集会をする。毎月15日暁時に「鈴の会団」にて鎮守の森に集りお掃除をして神様に礼拝する。

③また、年に6回、村道路の掃除の奉仕をする。鎮守の森の掃除の時は全班員が出席し、美しく出来た班員には緑色のリボンを、道路掃除の時には紅のリボンを、集りの時間に全班員が出席出来た班員には黄色のリボンをもらい、この三色のリボンによって向上すべくはげんでいる。これらのリボンは肩章の下に付けている。

④年長ガイドの中に、2級ガイドに進んだ者が6人中3人おり、この3人に指導者になってもらい、他の3人には指導者見習として協力してもらっている。普通ガイドの中にも2級ガイドに進めそうなものがある。

⑤春は道しるべを使って遠足をした。11月23日に新嘗祭を祝して組の催しとして区有林の松の落葉を集めた。売り上げ金の一部を組の基金にした。

長野第一組の入団式とウーレイの訪問について次のような記録が寄せられている⁷⁸。

昭和七年八月二十二日は一日千秋の思ひで待ちに待ちし嬉しい日でありました。朝早く先生をお迎へすべく副組長の土屋さんと御一緒に田中駅へ出ました。兼ねて約束の九時三十五分の下り列車は構内にすべり込みました。私は何んな先生かと想像し乍ら二級章を胸に付けて出口にお待ちして居りました処思った通り皆の尊い見るからに良い先生と直感致しました。

先生には私を御覧になってあなたが柳沢さんですかと問はれました。其の時私は長い間離れて居ました母親に会ふ様な気持がして嬉しいやら有難いやらで胸いっぱいになり涙さへあふれました。

組織の初めより色々と私共の為に御力をお尽くし下さいました懐かしい本部の先生私は未だ一度も外国の方とは口をきいた事が有りませんのでなんとなく心配でございました。けれど先生には思いの外日本語がお上手でいらっしゃいましたので喜びました。山間の一農村に有る私共の為に御足労下さいまして真実に嬉しい入団式をして戴いたと云ふ事は此の上もない喜びと思ひまして私共は本当にめぐまれたのだと心に感じました。

午前中に入団式をして戴く事に決めましたが私は皆が入団出来るや否やと思ひ乍ら年長ガイド、ブラウニの順に馬蹄形を作りましたが心配でたまりませんでした。年長ガイドの方々より初めましたが皆良く出来ましたので一寸安心しました。次にガイド、ブラウニとして戴きましたが思ひの外良く出来ましたので本当に嬉しく思はれました。何しろガイド三十二人、ブラウニ二十九人と云ふ大勢の志望者を入団して下さいましたのが先生には大変おつかれの事であつたとお気毒に思ひましたが先生にはお元気に式を終られましたのが本当に有難く感謝しました。空はなんとなく重く記念写真を撮

る時には畑に雨がぼそくと降り出しました。

あゝ折角準備して置いたのに雨が降つては無になってしまうと空をうらめしく眺めましたが雨は尚更強く降り、昼食は私の組のガイドの方々の手製料理でございましたのに先生にはお喜び下さいましてお召上がりになられた事が本当に嬉しく思ひました。一時より先生の熱心なるお話私共の脳裏に深くしみ渡りたるものにて其中世界の補導団員が実に百万人有る事を承りました。そして私共も今日から其の一員と成るのだとおっしゃられました時私は何んとも言ひ表す事の出来ない嬉しさと共に尚一層契約団則を守り立派な組となり益々向上して行かねばならぬと心に誓ひました。それから遊戯に取り掛り是れも頭と体を動かす面白い遊戯でございました。時間が来ますので一同集り団歌を唱ひ最後に先生の訓話を受け三指の礼をしたまゝ君が代を合唱して式を終わりました。それから粗末なる茶話会を開き遊戯、唱歌等を出しました。山間の者でとても都会の方々とは大変に相違し劣って居るとは思ひましたが入団させて戴きましたのはなんとなく親密な心持で見て貰ひました。雨は益々激しく出来る事ならお宿り戴いて色々のお話をお伺ひ申し度いとは思ひましたけれど先生のご都合上名残を惜しみつ御見送り申し上げました。

年長ガイドの方々も大変に先生とのお別れを惜しまれた様子でございました。強雨の中を自動車は田中駅をさして進みました。エキに着きました処時間はゆっくり有りましたので先生に御願ひして三人カメラに入りました。永遠に記念すべく併し是れは果して出来上がったのかどうか戴く事が出来ませんが淋びしく思はれます。

五時五十分のくんだり列車は先生を乗せて白い煙と共に発車。さようならお大事に。

以上である。長い引用となったが、ウーレイが訪れ、入団式を行った際の具体的な動き、さらに文面からは地方の東京からの指導者、とりわけ外国人に対する緊張を読み取ることも出来る。長野第1組は柳澤けさを、を指導者として1931年に11月に発足している。長野県新張少女団とも呼称され、ブラウニ、ガイド志望者に分かれて多くの団員が活動を行った。補導団としての活動に加え、地域の青少年活動（少女会）としての清掃活動、奉仕作業等の実施を伺うことができる。施設としては愛シスター会というキリスト教関係の施設を連絡先としているが、他の幼稚園卒園者のためのブラウニ、普通組とは構成が異なるものである。

第11節 茂原少女団—茂原聖公会（1931年—）

茂原少女会は聖公会日曜学校上級生等を対象に1931（昭和6）年から準備されたものである。香蘭女学校の東京第1組の第一期生であり、東京第2組指導者でもあった黒瀬（細貝）のぶが指導者となり、1931年6月に活動を開始した。黒瀬（細貝）のぶは、夫の黒瀬保郎伝道師（後、主教）と各地の教会で生活し、1927—29年を沼津で過ごし、その後この茂原で活動を行っている。

1931年度の機関誌『女子補導団』には「先頃から茂原で加入準備中の黒瀬夫人から左の報告を得ました」⁷⁹として次の点が紹介されている。

①この少女会は正式に補導団に加入していないが、補導団同様の内容をもっているため団報に報告させてもらう。刊行されている「指導者の友」に感謝する。

②会員は茂原聖公会信者、求道者、日曜学校上級生で、指導者4人、会員26人である。

③ツバメ、ハト、カナリヤの三組に分けて1931年6月に活動を開始した。定期集会は日曜の午後で、長老から聖書の話聞き、聖歌の練習、紐結び、会則、信号、救護、自然研究も少し行っている。補導団の体操も習い、教会でニルスブツクのデンマーク式を指導してもらった。時には教会の掃除、草むしり、芋ほり、花壇の下ごしらへを行う。

④一定以上の年齢の者を対象に、聖ルカ病院の看護婦から看護法を習い、千葉の婦人会長江島姉には週1回、計6回の編物講習を開いている。

⑤貸切自動車で、一の宮海岸に行き、野外炊飯したことが2回ある。秋には音楽、舞踏の会を行い、音楽会の収益の一部は教会のオルガンの基金とした。

⑥教会の庭は、下に田園を見晴し、遠く森に囲まれた川を眺められ、デージーの咲く芝生に松林もある。景色のよい庭と小さい聖堂と牧師館を拠点として活動して行きたい。

⑦手旗信号は海軍機関学校生徒から本式に習ふ機会があり、ましたので、各自が手製の信号旗を持って集っている。

⑧会員章はボール紙に色紙を貼ったものを胸に、忘れ物のない組には赤いリ、ヤーンを房にしてつけることにしている。

⑨全出席と優勝の組はその表を飾って行く。

⑩指導者である黒瀬が健康上の理由から手伝いが出来ないこと、学年末、入学準備のために集会出席率が低下しており、新学期にむけて活動を充実したい。なお、音楽、舞踏の会は旭ノ森幼稚園で実施、手旗信号は風戸健（海軍機関学校生）に依頼した。

以上、茂原少女会は、日曜学校上級生等によりツバメ、ハト、カナリヤの班活動が行われた。正式な補導団としては登録されないものであったが、聖アンデレ教会の東京第二組で副組長を経験した黒瀬（細貝）のぶの経験を反映した活動であった。

第12節 草津第1組ブラウニ・第2組ブラウニーマーガレットホーム・平和館 (1932年)

草津第1組のブラウニは1932（昭和7）年1月に発足した。草津聖マーガレットホームでネテルトン(Miss. Irene Mary Nettleton)⁸⁰が担当している。後に詳述するが、草津聖マーガレットホームは、草津はハンセン氏患者の「未感染児童ホーム」である。この地で布教と救済活動をしていた聖公会イギリス人の女性宣教師コンウォール・リー(Mary Helena Cornwall Leigh)たちによって1924（大正13）年、設立された施設である。第2組は草津平和館で本橋たみよの担当で、同1932年8月に発足した⁸¹。マギル(Miss. Maria B McGill)宅にて集会を行い、東京からウーレイが訪問して結成式を行っている。

機関誌『女子補導団』の1931年度版に草津第一組ブラウニについて次の報告がある⁸²。

私共は昭和七年の新らしい年と一緒に生れましたほんとうに赤ちやんでございます。

まだお仕事らしいお仕事は何も致して居りませんが皆喜んで出席種々のゲームやお話を通して理想のブラウニに成らうと努力して居ります。

以上からは、1932年初めに発足し、遊戯等を取り入れながら活動を開始したことが理解される。

機関誌『女子補導団』1932年度は、草津第二組ブラウニについて次の報告があった⁸³。

まだ生れまして三ヶ月程にしかありませんが皆ほんとうに仲良くなれました。集会の度お休みするものはほとんど御座いません。只今お仕事に編物を始めて居ります。

(草津第一組ブラウニの御報告を〆切までにいたゞけませんでした。)

以上の簡単な概略であるが、これを補うものとして同誌に草津のブラウニ団員からの報告がある。青木すみ子、助川ちよ子、萩原やく、佐々木厥子、山崎せつ子、石野田米子、畑山キクエ、富澤芳子、加科花子によるものであるが、その中で入団式の様子についての石野田の文を紹介したい⁸⁴。

八月火曜の晩六時マギル先生のお宅にあつまりました。本部のウーレー先生がいらっしやいました。礼拝をしてはじまりました。下町の組十六人、上町のブラウニの人もあつまってまいりました。まるくならんでじゅんばんに先生の前にいってむねにきしょうをつけていただきました。私はうける前にむねがどきどきしてをりました。ことばをむねの中でくりかえしながらウーレー先生の前に出ました。一．神と天皇陛下に努をつくしブラウニのおきてをまもります。二．毎日家のおてつだひをし又人々を助けます。ブラウニのおきて一．ブラウニは目上の人にしがひます。二．ブラウニはわがまゝをいひません。といひおわってむねにきしょうをつけていただきました。先生におじぎをして自分のせきにかへった。みんな一しょに礼をしてすはりました、それからいろんなあそびをしてわかれしました。

もうひとりのブラウニ、佐々木の文には次のように説明されている⁸⁵。

私達の為に、いただいた先生は本橋先生とマギル先生です。たまたまりー先生がおいでになって為になるお話をして下さいます。

私達のブラウニをする所はマギル先生のお家です。私はブラウニが大好きです。ブラウニははじめにブラウニのおきてをならいます。

おきてについては色々あります。神様、天皇をうやまふ事、友だちを愛する事、年よりをいたはる事、そうゆうやうな事ををへると、今度は色々のゲームをします。ほんとうにおもしろいです。ほんとうにおもしろいです。ブラウニををへると皆な一緒に帰ります。

ここでは、①草津第2組ブラウニは1932年8月にマギル邸でウーレイが参加して行われたこと。②本橋たみよ、マギルの指導によって運営が行われ、コンウォール・リーも関与していたこと、③ブラウニのおきてを順守しながら、遊戯等が行われていたこと、がわかる。

さらに、1933年度、草津第二組ブラウニについて次の報告があった⁸⁶。

寒さの為一月中お休みに致しまして二月から始めました。お蔭様で皆元気で大変に喜んで出席致します。又一生懸命にするつもりで御座ります。

以上、草津第1組のブラウニは日本聖公会の草津伝道の一環として、1932（昭和7）年1月にネテルトンによって聖マーガレットホームで始められた。第2組はマギル邸と草津平和館でマギルと本橋たみよが担当し、同1932年8月に発足、活動を行っていたことがわかる。

補注1 群馬県内ガイドの歴史

群馬県内のガールガイドの始まりとしては、1923（大正12）年、前橋聖公会においてベシー・マキム（Miss. Bessie M. McKim—マキム監督の長女）を代表とした前橋第1組の記録がある⁸⁷。

補注2 コンウォール・リーの草津伝道と教育活動について⁸⁸

草津の女子補導団活動の背景には聖公会の布教活動とメアリ・ヘレナ・コンウォール・リーに象徴される聖公会ミッションの福祉・教育活動がある。以下では、草津湯ノ澤とハンセン病患者、聖公会と救済事業について、コンウォール・リーの足跡と教育事業を中心に概説したい⁸⁹。

〔メアリの来日〕

メアリ・ヘレナ・コンウォール・リー（Mary Helena Cornwall Leigh・以下メアリと略）は、1857年5月20日にイギリスのカンタベリーで生れた。生家はイギリスの裕福な貴族で、父は印度駐屯軍の陸軍大佐であったが、メアリが幼い頃病没し、兄と共に母の手で育てられた。イギリスで初等、中等教育を受けた後、フランスで美術を学び、さらにスコットランドの聖アンドリュース大学で教育学、経済学、言語学、英文学を専攻し、1886年（29歳）にLLA（Lady Literature of Arts）を得た。文才も豊かで、4冊の著書がロンドンで出版されている。

兄とも死別した後、彼女は教会の教育事業等にたずさわっていたが、母と二人で世界一周旅行を経験し、その際に日本にも立寄って強い印象を持った。母の死後、1908（明治41）年、51歳の時に日本へのキリスト教伝道を思い立ち、英国伝道協会SPGの南東京主教の下で自給の伝道師となった。日本語を学びながら、千葉県、神奈川県および東京の教会で布教活動を行った。その後、メアリが草津伝道の接点を持つのは、1915（大正4）年の群馬県草津町訪問時のことである（この時、日本聖公会北東京

地方部のジョン・マキム監督、前橋のアンデルス長老および東京浅草の聖ヨハネ教会長老大藤鑄三郎も草津を訪問している)。当時の草津湯之沢は、ハンセン病者の療養地であり、生活・教育環境両面から多くの課題が存在していた。

〔草津定住〕

日本国内でのハンセン病者は明治以降、四国八十八ヶ所遍路道、山梨県身延山、和歌山県湯の峰、熊本県本妙寺界限、さらに群馬県草津湯の澤等での生活を行っていた。国内の行政自体にも偏見を持った移転・隔離が中心であり、じゅうぶんな対策は行われていなかった。1873（明治6）年にノルウェーのハンセンが「らい菌」を発見したこともあって、日本国内のキリスト教諸団体は布教と救済という観点から活動をすすめていった。

キリスト教のハンセン病への取組は、1889（明治22）年にパリ外国宣教会のテストウイドが御殿場の神山に復生病院を建設し、1894（明治27）年に米国長老派宣教師ヤングマンが東京の目黒に「慰廃園」開設、1895（明治28）年には、CMS宣教師のハンナ・リデルが熊本に回春病院を開設しており、1900（明治33）年には、1900年復生病院院長のベルトランが草津湯ノ沢において病院建設に着手し、ハンナ・リデルも同年湯ノ澤を視察している。

メアリは草津訪問と前後して東京の療養所「慰廃院」の訪問をおこなっていたが、病者の信仰団体である光塩会の宿沢薫とも話し合いを行い、草津での活動を決意することになった。彼女のイギリスの資産をもとに聖バルナバ・ミッションを開始し、視察の翌年である1916（大正5）年5月（59歳）に草津に定住し、以後20年間、女史の救済事業と伝道をすすめた。これは後に、1941（昭和16）年、国立療養所・栗生楽泉園に吸収されるまで続くことになった。

彼女たちが活動の拠点とした湯ノ澤聖バルナバ教会は、管理長老アンデルス、伝道師補宿澤薫、宣教師メアリ・ヘレナ・コンウォール・リーというメンバーで出発し、定住したメアリは主日礼拝、日曜学校、信徒訪問を行った。また、地元の若い女性を救護、收容するために地域の旅館を買い取り、「聖マリア館」と名付けて女子ホームとし、これが聖バルナバ・ホームの始まりとなった。続いて男子ホーム、女子ホーム、夫婦ホーム、家族単位で救護する準ホームが建設され、さらに「聖マーガレット館」というハンセン病者の子どもであり、発症していない「未感染児童」生活施設も建設された。メアリとともに活動した人物には前出の宿沢薫の他、女性伝道師の井上照子、医師の鶴田一郎たちがいる。

〔教育活動〕

メアリはイギリス時代から少年・少女向けの物語を書き、もともと青少年教育への関心が強かったが、草津でも一般の草津町民が住む上町地区と湯之澤地区の幼児・児童教育に力をいれ、湯之澤の子どもたちのために聖愛幼稚園を、上町の子どもたちのために愛隣幼稚園を設立した。

なお、メアリは1923（大正12）年に自宅に4人の少女を引き取って斎藤しんの協力を得て世話していたが、引き取る子どもの数の増加につれて福島の教会信徒であった先崎けさを専従のスタッフとしてむかえた。さらに、聖マーガレット館の運営を支援しガールガイドの担当者ともなったマギルとネトルトンをもかえて活動をすすめた⁹⁰。

マリア・B・マギル（Miss. Maria B McGill）は、米国聖公会司祭を父として、アメリカ合衆国メリーランドに生まれ、同州のハンナ・モア・アカデミーを卒業後、マサチューセッツ州のマウント・アイダ女学校の教師を経て1907（明治40）年に来日した。京都の平安女学院、大阪箕面学園勤務の後、メアリに共鳴して1928（昭和3）年に草津の聖バルナバ・ミッションに参加し、聖マーガレット館で児童の養育の他、教会の日曜学校、婦人会活動、聖愛幼稚園、愛隣幼稚園、聖望小学校を担当した。

マギルとともに聖マーガレット館で働いたのがネトルトン（Miss. Irene Mary Nettleton）である。メアリとネトルトンが出会ったのは、メアリが1929（昭和4）年に一時帰国をし、ロンドン南部のセント・ジャイルス・シスターフッド付属ハンセン病患者救護院を訪れてのことであった。ここで働いていたネトルトンを採用し、彼女は1930（昭和5）年8月に来日した。ネトルトンの主たる担当は聖マーガレット館であり、マギルは病者の学齢児童の教育を主に担当することになった（1936年1月に聖マーガレット館は火災のため全焼したが、同年6月、同じ場所に2階建ての現在の聖マーガレット館が完成した）。イギリス人ミッションの活動はその後、本橋たみよ、小笠原愛子たちが協力して引き継いでいる。

草津のハンセン病患者たちから「かあさま」と呼ばれ、また、彼女たちの事業も政府から認められるところとなったが、その後1936（昭和11）年にはメアリは高齢のため兵庫県明石に引退し、1941（昭和16）年12月18日に逝去した。

貫民之介の『コンウォール・リー女史の生涯と偉業』には、メアリの教会を中心とした生活について次のように説明されている⁹¹。

午前5時に早天祈祷、9時に日曜学校、10時から早祷礼拝と説教、午後は上町伝道所平和館にて礼拝と説教、夕には下町にて晩祷礼拝と伝道説教を行い、リー女史は礼拝毎に詩頌聖歌のオルガンを奏し、説教者なき時は自ら勧話をなし、管理司祭が出張し来る前には洗礼準備及び聖餐準備会を行った。リー女史は何れの会合にも出席し其間には病床にある信徒の訪問を行った。救護医療の方面で種々事務を処理する為其方面の役員会等もあり、全く寧日は無かつた。されば雨の日も雪の日も湯之澤の巷にリー女史の姿を見ない事は無かつたのである。

第13節 久喜第1組ブラウニー久喜児童の家（1932年—）

久喜1組は埼玉県久喜町の幼稚園で始められたブラウニーである。日光の木村（結婚後、牛山）里代の指導を受け、倉戸としみ、大宮の大越房子、加藤きみ子が協力した。193

2年に約30名のブラウニが入団した。

1932年、倉戸三郎（戦後、日本安全衛生協会会長）と姉の倉戸敏、大宮愛仕母学会で副校長を務めていた桜井（結婚後、大越）房子、木村里代らによって始められた「久喜児童の家」が母体となった。児童の家は、子どもたちや保護者に新しい人生観と奉仕の精神をとの趣旨で始められたもので、キリスト教童話を中心として子どもたちに働きかけ、ブラウニの活動もその中のひとつとして取り入れられたものである⁹²。ブラウニは数年継続し、児童の家は1942（昭和17）年まで継続した。

1933年度、久喜第一組ブラウニについて次の記述がある⁹³。

不可思議なブラウニ運動に参加すべく、毎日曜午前集会を持ち、郊外運動と自然研究に努力したいと各員力んでゐます。之の運動には、深い理解と高い明日への希望による保護者各位の援助が必要と思はれますので其の為に祈つてゐます。

さらに、倉戸静子の記録によれば、活動の概要は次の通りである⁹⁴。

- ①ブラウニは1932年、久喜児童の家（こどものいえ）で開始された。
- ②週日は幼稚園、日曜は日曜学校が行われており、ブラウニの集会は日曜の午後に開催された。
- ③フェアリー、ピクシー、グノム等6人編成の班が6あった。
- ④野原での道しるべつけと冒険、紐結びと三角布の練習、歌とスタンツを取り入れた活動をおこなった。
- ⑤各自の役割をもって遊び会、晚餐会、クリスマス、イースター、花の日等の行事を開催し、フェアブルの昆虫記、グリム、アンデルセンの童話をきいた。
- ⑥茶色のエプロンをつくり、ブラウニの誓を思いながら真鍮のバッジ磨きをした。

以上、久喜1組は久喜児童の家で始められたブラウニであり、先行する大宮、日光の補導団経験者の指導・協力のもとに始められた活動であることがわかる。幼稚園、日曜学校と組み合わせられた教育活動でもあり、数年継続しているが詳細な年月は不明である。

小結

本章では地方の活動について、組の発足年代順に、神戸、大連、大阪、盛岡、大宮、福島、長春、日光、沼津、長野、茂原、草津、久喜の順で概観を試みた。発足時期、地域と団体名、指導者、その背景について確認した。各団の指導者、活動の特色については下記の通りである。

神戸では、1923年に女子補導団の神戸地区代表 V.L. マッシューズ、松蔭高等女学校の上西ヤエ、浅野ソワ子、藤喜代子、新井外子の指導で始められた。神戸ボーイスカウトとも連絡関係があり、ミカエル教会、松蔭高等女学校で活動した。1927年頃から生徒の時間の都合から普通団員の活動が停滞しブラウニのみの活動になり、1929年に一時解散した。

大連では、1924年にイギリス人宣教師でイギリスのガールガイド中国支部長・カー

トリッジの指導で始められた。カートリッジの帰国後は田村幸子が幹事となり、大連市高等女学校生徒を中心に活動し、幼女隊もあった。1924年には後藤新平、三島通陽の訪問があり少年団との連携もあったが、卒業生の上級学校進学、「満州事変」で1931年に活動を休止した。

大阪第1組は、M.C. バッグスの指導で始められた。バッグスが英語の指導のため、高等科英文科の生徒対象に発足した。英文科の廃止後は第2組のみになった。第2組はM.C. バッグス、A.S. ウィリアムアス、加藤文子が指導を担当し、学校全体の協力があり、日曜学校、学校YWCAの一部としても活動した。多忙な学校の時間割、1934年の室戸台風被害を契機に活動を停止した。なお、1929年に大阪四ノ島セトルメントでも大泉清子が指導者で活動を行った記録がある。日曜学校のクリスマス連合等で活動した。

盛岡では1927年から、岩泉みどり、松岡良枝の指導で始められた。盛岡聖公会の村上秀久、村上しげ子、少年団盛岡地方連盟松岡直太郎が協力し、補導団本部のウーレイ、ヘルストン、桜井国子が参加して発団式を行っている。団員の学校の課題が忙しく1929年以降に停滞した。1920年からディクソンの下で補導会活動開始の記録もある。

大宮では、1927年からE. F. アプタンの開設した愛仕母学会で、桜井（大越）房子、佐々木逸子、加藤きみ子が指導者となって始められた。桧垣茂、竹井富美子、井原たみ子、ウーレイが指導に訪れている。日光、久喜での幼稚園ブラウニ発足にも協力している。

福島では、1929年から公民学校教員の渡井芳枝が指導者となり、片曾根村農業公民学校で発足した。渡井に対して桧垣茂が入団式を行い、その後普通団員、少女部員に対する入団式が香蘭女学校で行なわれた。渡井の退職によって1930年に休会している。

長春では、1929年に発足し組長代理を田中富貴子がつとめた。団員は長春高等女学校生徒であり、少年団の長春健児団の協力があつたが、1931年の「満州事変」でした。

日光では、1930年に女性宣教師のM. ハンプレ、大宮愛仕母学会出身の木村里代の指導で四軒町聖公会・四軒町愛隣幼稚園で始められた。日曜学校の中等科の生徒が中心となりブラウニ7名入団し、後、一部は日光高等女学校生徒が日光第1組を結成した。

沼津では、1931年から、女性宣教師のT.C. エドリン、新藤とし子、ブラウニでは村山愛子、南岡春枝、佐藤千代子が指導した。四恩幼稚園卒園者の英語とゲームを学ぶ若葉会が母体となった。

長野では、1931年に柳澤けさをを指導者に小県郡弥津村愛シスター会で始められた。長野県新張少女団として発足した。ブラウニ、ガイド志望者に分かれて活動し、入団式にはウーレイが参加している。

茂原では、1931年に香蘭出身の黒瀬（細貝）のぶを指導者として少女会が発足した。日曜学校上級生等を団員とし、県内の旭ノ森幼稚園で音楽会、聖ルカ病院看護婦の講習、海軍機関学校生による手旗信号指導が行われた。

草津では、1932年に活動が開始された。第1組はI.M. ネテルトンが指導を担当した。コンウォール・リーの草津伝道とハンセン病者支援と教育の一環として建設された聖マー

ガレット館を会場とした。第2組は M. マギル、本橋たみよが指導を担当し、マギル邸、平和館にて集会を継続した。東京からウーレイが訪問し、入団式を行っている。

久喜では、1932年に倉戸としみが指導し、日光の牛山（木村）里代、大宮の大越（桜井）房子、加藤きみ子の協力で発足した。久喜児童の家が母体となりブラウニ活動が数年継続した。

この他、1923年に前橋聖マッテヤ幼稚園の B. マッキム（マッキム監督長女）が前橋第1組を始めた記録がある。

以上を概観すると、日本女子補導団に改組されて、便覧において活動の原則とキリスト教主義を分離した後においても、実際には多くの活動に聖公会に関するイギリス人宣教師、聖公会教会、学校、幼稚園の教職員が多く関わっており、また相互に連携していることがわかる。

大連、長春等の組は「満州事変」という戦時情勢によって活動を停止し、大阪の組は室戸台風被害が休会の原因となった。一方で国内の大都市、地方部においても、児童生徒の多忙さを理由に活動の停滞が指摘されている。女学校生徒による普通組の停滞の一方で、地方都市におけるブラウニの組織が試みられている。

註：

- 1 『神戸ボーイスカウト会報』創刊号・1924年1月、8ページ。
- 2 松蔭高等女学校同窓会『千と勢』第16号・1925年11月、2ページ。
- 3 『少年団研究』第2巻、第3号・1925年3月、27ページ。
- 4 『女子補導団』第4号・1929年3月、4ページ。
- 5 『女子補導団』第5号・1930年3月、11ページ。
- 6 委員長山田知輝『兵庫のスカウト運動の原点と継承』神戸ボーイスカウト50周年記念誌委員会、1992年、より。
- 7 『女子補導団』創刊号・1926年3月、9ページ。
- 8 『女子補導団』創刊号・1926年3月、7ページ。
- 9 『女子補導団』第3号・1928年3月、5-6ページ。
- 10 同前、6ページ。
- 11 『女子補導団』第5号・1930年3月、10ページ。
- 12 『女子補導団』第6号・1931年3月、5ページ。
- 13 前掲の『日本聖公会教役者名簿』によれば、M. バッグスはイギリス CMS の派遣宣教師で、1898年生まれ。日本の在任は戦中の帰国期間を除いて1925-1962であり、徳島半田、プール、徳島イマヌエル、佐古聖テモテ等の教会を担当している。A. ウィリアムスもイギリス CMS の宣教師（1889 - 1970）。また、日本聖公会の『大阪教区報』（1970年10月）によれば、ロンドン大学を卒業後、ウィロズ宣教師学校で学び、1917年に来日した。日本在任の期間は1917-1940、戦後の1952-1954である。戦後はプール女学院の中、高、短大で教えた他、大阪教区で奉仕活動等に尽力した。香蘭に在任した記録もある。
- 14 『女子補導団』創刊号・1926年3月、10ページ。
- 15 『女子補導団』第2号・1927年3月、48ページ。
- 16 『女子補導団』第3号・1928年3月、6-7ページ。

英語原文は下記の通りである。

Miyamachi, Amagasaki,

I've been trying hard to get my Guides to write something for the magazine, but they are all so busy with examination that I've got nothing. So perhaps I'd just better report on the doings of our two companies.

The 1st Osaka has numbered 16 Guides this year. I've been giving them instruction in first aid and sick nurse work but they have not taken the badges yet. They have also learnt English country dances and songs. We are corresponding with two Guide companies in England who sends their magazines and letters very regularly so that we really feel that we are one big sister hood all over the world. All these girls have individual guide correspondents in America or England, and find great interest in the letters, post cards and photographs which pass between them.

One day we had a visitor from China who told us about her Guide company in Loochow, and left us a photograph of them. This with other photos of Indian and African and English companies pin on their notice board.

Last April I went with a few of the girls to a kind of camp. We stayed in a house, not in tents, but tried to get out as much as possible, but unfortunately it rained most of time. Nevertheless they kept the true Guide smile through out, and I think we learnt many thing from each other of cooking, entertaining and Guide spirits, but chiefly of our great ideal.

The 2nd Osaka now numbers about 30, some have had to give up for a while as they are doing special exam work. They are working hard for their second Class badges which I hope many of them will get before the end of this term.

I'm afraid this is a very short report but I too am pressed for two.

Yours Sincerely

M. C. Boggs.

Captain 1st 2nd Osaka.

17 『女子補導団』第4号・1929年3月、4ページ。

18 『女子補導団』第5号・1930年3月、10ページ。

19 『女子補導団』第6号・1931年3月、5ページ。

20 『女子補導団』第7号・1932年3月、6ページ。

21 『女子補導団』第8号・1933年3月、6ページ。

22 『女子補導団』第9号・1934年3月、5ページ。

23 『女子補導団』第5号・1928年3月、11ページ。

24 『じゃびらあてー盛岡聖公会五十年小史』1959年、および『銀杏ー盛岡聖公会付属仁王幼稚園80年史』1988年、を参照した。

25 『女子補導団』第3号・1928年3月、9-12ページ。

-
- 26 同前、10 ページ。
- 27 同前。
- 28 同前。
- 29 同前、11 ページ。
- 30 『女子補導団』第3号・1928年3月、37 ページ。
- 31 『女子補導団』第4号・1929年3月、4 ページ。
- 32 『女子補導団』第4号・1929年3月、12 ページ。
- 33 『女子補導団』第4号・1929年3月、40 - 41 ページ。
- 34 同前、41 ページ。
- 35 同前。
- 36 『女子補導団』第5号・1930年3月、10 ページ。
- 37 前掲『じゃびらあてー盛岡聖公会五十年小史』によれば、1929年12月には新礼拝堂の聖別式が行われ、宗務上の多忙さに加え（7 ページ）、市内三業地の反対運動、さらに村上夫妻の子どもの病気、療養等（98-99 ページ）がこの時期に重なっている。
- 38 日本ボーイスカウト岩手連盟『岩手のボーイスカウトの歩み』1980年、20-21 ページ。
- 39 同前、24 ページ。
- 40 前掲『じゃびらあてー盛岡聖公会五十年小史』。
- 41 『女子補導団』第5号・1930年3月、40-41 ページ。
- 42 『女子補導団』第3号・1928年3月、37 ページ。
- 43 『女子補導団』第3号・1928年3月、38 - 41 ページ。
- 44 『女子補導団』第4号・1929年3月、4 ページ。
- 45 『女子補導団』第4号・1929年3月、41 ページ。
- 46 『女子補導団』第5号・1930年3月、9 ページ。
- 47 『女子補導団』第6号・1931年3月、4 - 5 ページ。
- 48 『女子補導団』第7号・1932年3月、6 ページ。
- 49 『女子補導団』第8号・1933年3月、6 ページ。
- 50 森清一『みどりの舟ーアプタン先生の愛仕の生涯ー』および、武井 幸子「埼玉県における先駆的保育活動ー大宮名誉市民 アプタン女史の業績と生涯ー」『埼玉保育短期大学紀要』1990年。
- 51 『女子補導団』第4号・1929年3月、4 ページ。
- 52 『女子補導団』第5号・1930年3月、21 ページ。
- 53 『女子補導団』第5号・1930年3月、9 - 10 ページ。
- 54 同前、3 ページ。
- 55 『女子補導団』第7号・1932年3月、2 ページ。
- 56 『女子補導団』第5号・1930年3月、10 - 11 ページ。
- 57 『女子補導団』第7号・1932年3月、2 ページ。
- 58 ハンプレ (Miss. Marian Humphreys・1886-1968) はアメリカ聖公会 (PE) から派遣された宣教師である。在日期間は 1915-1937 年であり、仙台、金沢、津、日光の各教会に所属した。(資料：『日本聖公会教役者名簿』)
- 59 『女子補導団』第4号・1929年3月、4 ページ。
- 60 『女子補導団』第6号・1931年3月、2 ページ。
- 61 『女子補導団』第6号・1931年3月、4 ページ。
- 62 同前。
- 63 『女子補導団』第7号・1932年3月、5 - 6 ページ。

-
- 64 『女子補導団』第8号・1933年3月、6ページ。
- 65 『女子補導団』第9号・1934年3月、5ページ。
- 66 沼津の聖公会および四恩幼稚園については、『日本聖公会 沼津聖ヨハネ教会百年誌』1998年を参照した。
- 67 エドリン (Miss. Edlin, Constance Maria Annuntiata Townshend・1898-1979) はイギリス SPG ミッションの女性宣教師で在日期間は1927-1938である。東京、沼津、鴨川、香蘭を転任した。(資料:『日本聖公会教役者名簿』)
- 68 『女子補導団』第7号・1932年3月、6-7ページ。
- 69 『女子補導団』第8号・1933年3月、6-7ページ。
- 70 『女子補導団』第8号・1933年3月、7ページ。
- 71 『女子補導団』第8号・1933年3月、33-34ページ。
- 72 同前。
- 73 同前。
- 74 同前。
- 75 『女子補導団』第9号・1933年3月、5-6ページ。
- 76 沼津の聖公会および四恩幼稚園については、『日本聖公会 沼津聖ヨハネ教会百年誌』1998年を参照した。
- 77 『女子補導団』第8号・1933年3月、7ページ。
- 78 『女子補導団』第8号・1933年3月、35-36ページ。
- 79 『女子補導団』第7号・1932年3月、34-35ページ。
- 80 ネテルトン (Miss. Irene Mary Nettleton・1898年生まれ、日本着任は1926年) イギリス SPG の女性宣教師で神戸、草津の教会に所属した(資料:『日本聖公会教役者名簿』)。
- 81 『女子補導団』第8号・1933年3月、53ページ。
- 82 『女子補導団』第7号・1932年3月、6ページ。
- 83 『女子補導団』第8号・1933年3月、6ページ。
- 84 『女子補導団』第8号・1933年3月、41ページ。
- 85 同前。
- 86 同前、5ページ。
- 87 『少年団研究』第2巻、第3号・1925年3月、27ページ。
- 88 「証人の足跡」〈聖公会新聞〉第561号・2001年3月25日「証人の足跡」および日本聖公会北関東教区の1Web ページ、中村茂『コンウォール・リー女史と草津湯ノ澤への道』2003年11月23日草津町役場講演会資料(群馬県立図書館蔵)、日本聖公会『湯ノ沢聖バルナバ教会史』1982年、貫民之介『コンウォール・リー女史の生涯と偉業』大空社・1995年(再販)、等を参考にした。
- 89 日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたちー日本聖公会人物史ー』300-303ページ。
- 90 「証人の足跡」『聖公会新聞』第571号、2002年2月25日。
- 91 前掲『コンウォール・リー女史の生涯と偉業』82ページ。
- 92 ガールスカウト日本連盟『ガールスカウト半世紀の歩み』1970年、41ページ。
- 93 『女子補導団』第9号・1934年3月、6ページ。
- 94 前掲『ガールスカウト半世紀の歩み』40-41ページ。